

統

一

法財人團
統
一團發行

次 目

佛敎の根本と其の應用(其一)……………	本多
開目鈔講話(第二十講)……………	小林
日蓮宗概観(其十二)……………	梶木
無窮の子……………	木田
記事……………	芳雄
○本部團報	
○大日本立正會報	
○福島支部報	
○團費誌料寄附金及維持費領收	
大藏經要義續篇(其十)……………	本多
	日生

號月六年三十四第

13/11-21

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ護妙會アリ自慶會アリ
又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見シ 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揚シテ國民精神ノ振興ヲ培養シ立正安國ノ大業ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ實費シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ匯出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

佛教の根本と其の應用 (其二)

本多日生

緒言

今日は「佛教の根本と其の應用」と云ふ題を掲げて置きました。此の問題は最も重大な事でありまして、佛教の教への根本を突留めて、どう云ふ所が佛教の根本であるか、一方から言へば色々の宗派を超越して佛教其のものの根本義に進んで見たい。更に一切経様々の御經があるが、それ等を超越して佛教全體の根本精神を明かにして見たいと云ふ考で「佛教の根本」と云ふ言葉を使つたのであります。もう一つは佛教といふ教は衆生濟度、世間安立と云ふ目的に向つて與へられたものでありまして、唯だ佛教の教が教として存するのではなくして、人々の間に接觸を持つて衆生を濟度し、世間を安立すると云ふ目的を成就する爲に佛教は存在するのであります。故に、其の佛教を實際に働かして行く上に就ての應用を誤らぬやうにすると云ふことも非常に大事なことである。何れの時代、何れの社會に對しても佛教はそれに適應するところの應用を先師先輩に依つて試みられたものであります。今日は人生

社會の事柄が非常な變化を來たしたのでありますから、其の應用の上にも必然此の時代、此の人心、此の社會に適合する所の佛教の應用を試みて行かなければならぬのであります。其の佛教の根本を突止めて、時代の要求に適應すべき應用は如何にあるべきかと云ふことに就て、自分の考を申述べて見やうと思ふのであります。

佛教研究の通則

此の佛教の根本並に應用と云ふことに就ては、デツと考へるにしても先づ斯う云ふ事が領解されなければならぬと思ふ。佛教は非常に活潑な宗教であります。即ち御經の數にしても何千卷と云つて存在して居るのである、さうして其の傳播した歴史は二千八百年の歳月を閲し、其の傳播した區域は廣く全世界に擴つて居るのであります。随つて其の佛教の根本及び應用と云ふことを觀察するに就ては非常な準備を要する事でありまして、輕々しく之を斷定する事は不可能な事でありまして、併ながら茲に一つの方法を以て進んで參るならば、それは必ずしも不可能な事ではないのであります。と云ふのは總て斯う云ふ大きな學問及び宗教其の他思想を研究する所の法則と云ふものが存在して居るのであります、それは廣く今日の人類の文化に於て認められて居る所の研究法則と云ふものが出來上つて居るのであります。

其の法則とは何であるかと申せば、一つは分裂觀と云つても宜しい、分裂的の見方である、一つは混同的の見方、もう一つは折衷的の見方、更にもう一つは統一的の見方と云ふ、此の四つの法則と云ふものが、大きな學問や思想を研究し觀察する上に於ては先づ以て最初に考へて置かなければならぬ事でありまして、佛教のやうな活潑な宗教を觀察しやうとするには、今申す所の此の四つの見方の中に於て最初に其の方針を決定することを要するのであります。

分裂的佛教觀

分裂的の見方と云ふのはどう云ふことかと云ふと、此の佛教の澤山のお經に對し、色々の思想に對して切れ／＼に自分の感じた所、自分の宜いと思つた所を取つて以て是が佛教なりとして、さうしてそれを順次に宣傳して行くのであります。從來の所謂佛教諸宗と云ふものは恰も此の分裂的の見方から起つて居るやうに思はれるのであります。一二の例を挙げますれば、例へば禪宗と云ふものは座禪をするところが非常に良い事であると考へ、さうして先づお經などは餘り重く考へないで、佛様の覺りを其の儘自分の心に傳へて行かうとする方法を取つて、それが一番良いと云つて禪宗と云ふ宗旨のやうなものが出て來て居る。それはさう云ふ修行なり座禪の方法なりが假に良いとしましても、それは佛教を修行する上の一つの方法に過ぎないのであります、それだけで以て本當の佛教が分る譯のものではないのであり

ます。又一方には阿彌陀様の四十八願と云ふものを信じて、阿彌陀の佛號を稱へれば極樂往生が出来ると考へて、念佛稱名の行を勵むと云ふことをやるのであります。さうして其の念佛稱名以外の有ゆる修行の方法は難行である、役に立たぬと云ふやうに言つて居るのであります。さう云ふ風に分裂的に切れ切れに佛教を見て行くと云ふと、幾つでもそんな議論は生れて来る。後から後から少し偉らいやうな人が出る。と直ぐ佛教は分裂をしてしまつて、其の纏りが何處にあるのか、それが完全な佛教であるかと云ふことが分らなくなつてしまふのであります。先づ從來の佛教に於ける宗派分裂の状態から見ますれば、是は即ち佛教に對する分裂的の觀察が斯の如き有様を作つたものであると申すことが出来るのである。然らばそれが宜しい事かと云ふことになる、無論さう云ふ分裂的の見方は宜しくないと云ふことは、學問研究の法則から考へて見て直ぐに分る事である。他の學問であつたならば、そんなことは駄目ぢやと云ふことは殆んど問題にならぬ程明瞭である、今頃左様な觀察方法を以て、學問研究をするのに自分の氣の向いた所とか、唯だ一寸良いと思つた所に頭を突込んでそこだけやると云ふやうなことは、學問研究に志す者の態度としては許されない事でありませう。

混同的佛教觀

第二の混同的佛教觀といふはどうかと云ふと、丁度其の正反對にあるものでありまして、佛の説か

れた教は何れ愚かはないのである、最初鹿野園の説法より最後拘尸那城の説法に至るまで、總て釋迦牟尼の絶大の覺り、廣大の慈悲よりして現れ出たる如來の聖教であつて見れば、其の中に甲乙優劣を見てあゝだ斯うだと云ふやうな事は餘計なことである。それは恰も黄金の廷べ棒を以て或は指輪を拵へ、或は時計を拵へ、或は眼鏡を拵へたやうなもので、其の結果に於ては多少形が違つて現はれても、其の質の金であることに於ては同じ物である、如來の聖教は一切經皆金である。斯様に申して、一切經の中に何等中心を立てず綜合の標準を立てずして、唯だ漠然と一概に如來の聖教は皆尊い、人間の機根に對して一時的に與へられた方便の教も、又印度傳來の其の時限りの話も、さう云ふ事柄の區別はしない、絶對永遠の眞理も、唯だ印度の傳統的の思想から當時世間に用ゐられて居ることを其の儘應用せられた事柄も、皆一度佛教と云ふものの中に入れば其の價値は同じ物だと云ふやうな觀念を有つのであります。であるから極端に言へば、お經の中に書いてある字であるならば「惡」と云ふ字でも「罪」と云ふ字でも「地獄」と云ふ字でも何でも皆有難いのだ、人を殺すと云ふことでもお經の中にある「殺」と云ふ字は有難いのだと云ふ事になつて、一々文々皆是れ結構である、盜賊と云ふ字も人殺しと云ふ字も皆宜しい、如來を通せば悉く有難いものであると云ふ風に尊敬をする所から、一寸聞くと非常に信念も強し、くだらない宗派の争を超越した卓見であるかの如くに見える思想であります。併ながら其の思想の内面を吟味致しますと、唯だ漠然として佛の教は尊いと考へた、其の考を以てどこまでも押捲つて行

くのであつて、前の分裂して一部分にまごついて居る者に對抗する場合にはちよつと道理のやうに見へます。恰度左傾運動の盛んな時に右傾者が出て来て、棒を掲げて邊り構はず暴れ廻はると云ふ事も勇ましいやうに見えます、餘りに歐米心酔の弊に堪へぬと云ふので、帝國ホテルでダンスをして居る所に日本刀を抜いて暴れ込んだ、或はハイカラな男女の銀ぶらを脅かす爲に銀座街頭の硝子窓を石をぶつけて割つて廻つたと云ふやうな事は、それは唯だふわり／＼浮いた氣分でやつて居る人間と、ダンス場で剣を振廻はす人間とを相對すれば、何か意味があるやうに思はれるけれども、本當に考へて見ればそれは決して眞の遣り方ではないが如く、佛教に對する混同的觀察と云ふものは決して正しいものではないのである。學問の上ではさう云ふ思想は誰も認めるものではありませぬ。佛教の研究に於ては今の處は未だ未だ幼稚でありますから、分裂的でも混同的でもそんな事は構はない、有難いと思へば有難いのだと云ふやうな事でやつて居りますけれども、之を思想研究の方式に移した場合には、そんな遣り方は問題にならぬと云ふことは、他の學問研究の方法に於て既に明に相場のきまつて居ることでもあります。

折衷的佛教觀

第三に折衷的の佛教觀と云ふものは、是は良い所だけを集めて佛教を見て行かうとする。佛教の中には方便もある、一時の應用もある、印度の傳統的觀念もある、例へば須彌山説であるとか、地動説であ

るとか云ふやうなことは、印度傳來の思想であるから、そんなものは切離して良い所だけを集めて見たら宜からう、斯う云ふ具合に善きを取り惡しきを捨て、折衷して佛教を見て行けば本當の佛教が分るのだと云ふ遣り方である。是も鳥渡折衷と云ふ言葉を表面から見ると、如何にも善きを取り惡しきを捨てて良い所ばかりを集めると言へば、それで素人には「成程それはうまい、是が一番よさうだ」と考へられるのでありますけれども、學問研究の場合には折衷主義と云ふものは認められないのであります。何故に折衷主義と云ふものが宜くないかと申すと、折衷と云ふことはこちらに何等の標準なしに、唯だよさうな所を集めると云ふだけで、正確なる觀念はないのである。譬へて見れば、今日の佛教界に於ては通佛敎主義などと云ふ人がありますが、一體通佛敎と云ふのは何の事であるか分らないのである。唯だ其の時の演説に都合のいゝやうな事をあらからこちらから引張つて来てやるのであつて、どこまで行つても本當には纏りがつかない。其の時其の時に任せて折衷するのであるから、先づ御馳走で言ふたならば西洋料理とも支那料理とも日本料理ともつかないけれども、まあそこへ色々な物を並べてある、支那料理のやうな所もあれば、西洋料理のやうな所もある、日本料理らしい所もある、けれども結局それは安料理であつて、さう立派な料理とは認められないのである。寄せ集めてよさうな所だけ取るなんと云ふやうなことは出来るものではない、能く世間には「日蓮の元氣と、法然のやさしみと、禪宗の落付きと、天台の學問と寄せ集めると立派な物になる」と云ふやうなことを言つて居る坊さんがある。ち

よつと素人が聞くと成程いゝ所だけ集めてある、日蓮の元氣の旺盛なる所、法然のやさしい所、それに天台の智慧と、禪宗の膽力を加へたら偉らしいものが出来るナと云ふ風に考へるのでありますが、借てさう云ふ事を言つて實際にどう云ふものが出来るかと云ふと何にも出来ない。恰度今の支那料理でもなく西洋料理でもなく日本料理でもないと云ふやうな御馳走は、場末の安料理屋ではやつて居るけれどもそれは下等な料理である、東京でも大阪でも一流の料理屋に行つたならば、「お前の所の料理は何だ」「へい寄せ集めでございます」と言ふやうな所は一つもありはせぬ。恰度そんな風に折衷主義と云ふものは大變具合が好いやうであるけれども標準なしにやつて居る。建築で考へても日本建築でもなし、西洋式でもなし、印度式でもない、よさそうなのを寄せ集めたのだと云ふやうなものは、それは其の主人が本當の建築學上の知識もなく、常識もなくして、唯だ「俺は斯んなのが好きだ」と云つて一人でやつた時にそんな物が出来上がるので、結局世間の物笑となると同じ結果に陥るのであります。それ故に今の所謂通佛敎などと云ふことを標榜して働いた人は大分澤山ありますけれども、明治以來今日に來たつて結局空虚である、何も遺して居らぬ、通佛敎的運動と云ふものが如何なる効果を奏し、どんな成績を擧げて居るかと言へば何にもないのであります。でありますから折衷的の佛敎觀と云ふものは、其の折衷をする所の根本の標準がなく、随つて正確なる歸趣がない、そこに非常な缺點が起るのであります。

統一的佛敎觀

然らば第四の統一的佛敎觀と云ふものはどうであるかと云ふと、是は即ち其の標準を明にし、其の歸趣を明にして行くのである、統一の精神を正しく立て、綜合の標準を明にして、それから一切のものを綜合し聯絡を取つて、そこには折衷も行ひ、總て一定の標準歸趣に基いて一切を纏めて行くのであります。丁度それは人間の思想で言へばチャント統一した中心があつて、さうして色々の事を知つて居る者が働いて行けば立派な人間になるやうなものである。其の心の中心に意思もなく理想もなく觀念の中樞と云ふものなしに、唯だ其の日其の日具合のよささうなことを言ふて暮す、主義もなく理想もなく一貫したる觀念なくして、何でも人間は先づ善い事を考へて善い事を言はなければならぬと云ふので唯だ其の日其の日の出來心で、人に話をする時分に道德に觸れないやうな事だけ言ふて居つた所が、それは何等の見識もなく何等の力もないものである。目的と云ふものが明にならなければ、其の人間は人よしの氣抜け野郎と云ふものが出來上がるのであつて、どうしても人間は確りした一つの中心觀念を明かにしなければならぬ、佛敎の見方に於てもそれと同じ事である。

此の統一的佛敎觀なるものは、學問研究上に於ては一番宜しいと云ふことになるのである、一切の學問の法則上是が今日一般に認められて居る所の最もいゝ法則である。哲學を學ぶと言へば、哲學史に

表はれて居る所の色々の思想に對して、之を單に分裂的に考へてはいかぬ、混同的でもいかぬ、折衷的でもいかぬ、統一的にチャント其の哲學史を貫ぬいて見て、西洋哲學を纏め上げれば斯う云ふことになると云ふ所に落着かなければならないのである。一切の事柄の研究法則は統一的でなければならぬと云ふのが、先づ今日の文化が有して居る所の最も優れた結論である。佛敎の研究も之に除外される譯ではないのであるから、從來の極端な宗派の便宜に依つて分裂を主張して居る所の佛敎觀の間違は明瞭なる事である、又總て佛敎は皆ち釋迦様の敎であるから敢て優劣を見ることはないと云つて、標準なしに漠然として混同を主張すると云ふことも、矢張り分裂的觀察と相似たる一方に偏したる佛敎觀と言はねばならぬ。左様な思想であつたならば何時の時代でも世の中から葬むられてしまふ所の極く幼稚な佛敎觀である、それは素人の佛敎觀であると言はねばならぬ。折衷的の佛敎觀は少し氣が利いて居るやうであるけれども、それは前に言ふ通り色々の弱點があつて到底完全なるものではない、唯だ一つ、何時の時代に於ても又將來に對しても眞に價値有る佛敎觀なるものは即ち統一的佛敎觀あるのみである。(次續)

開目鈔講話

(第二十講)

小林一郎

されば前四味の間は教主釋尊、法慧菩薩等の御弟子なり。例せば文殊は釋尊九代の御師と申がごとし。つねは諸經に不説一字と、かせ給もこれなり。

前講にも申したやうに、釋尊が敎を説かれるに當つて、御自分より先に法慧・功德林といふやうないろいろな菩薩が説かれた、その説かれた後で釋尊が華嚴經の敎を説いて居られるのであるから、それで法華經以前の敎を説かれる間に於ては、釋尊と雖も

法慧菩薩といふやうな諸菩薩のお弟子と見える。併ながら法華經を説かれる時になると、さういふ法慧とか功德林とかいふやうな菩薩の説かれたよりも、モツと深い、曾て誰も説かなかつたやうな事を説かれたのであるから、茲に至つて初めて釋尊の釋尊たるどころの特色が現れて、成程釋尊のお考といふものは非常に深いものだ、昔から誰も考へ到らない所まで考へ到られたのだから、これこそ一切の人間界天上界の共に仰ぐべき師であるといふことが解つたのである。その法華經以前に於ては、釋尊の敎と

いふものはそれ程深いものではなかつた。それで人
が見れば釋尊のお弟子のやうに見えて居る人でも、
實際言へば釋尊よりも先輩であるといふ風に考へて
居る場合が多い。例へて言へば文殊といふ菩薩は、
釋尊より九代前の師であると言はれて居る。

これは法華經の中にあることでありますが、昔日
月燈明佛といふ佛様が御出現になつて教をお説き
になつた時に、その日月燈明佛のお弟子に妙光と
いふ人があつて、この妙光が佛様の教を十分に學び
傳へてさうして、これをその佛様がまだ王である時
に、お子様であつた人達にその教を傳へたといふ、
その王子の一人が後に至つて釋迦様となつたとい
ふことであるのですから、して見ると釋迦様が覺
り得られたのは妙光のお蔭である、斯う考へられる。
その妙光が後に文殊菩薩として世の中に出られたと
いふことになつて居る。斯ういふ關係を考へて見る
と、文殊菩薩は釋迦様より師である、その日月燈

はこれなり。此時こそ諸大菩薩、諸天人
等は、あはて、實義を請ぜんとは申せし
か。

無量義經といふものは、經としてはそんなに深い
事を説いて居るものではないけれども、法華
經を説かれる前提としてはそれは非常に重要な意味
を有つて居るものと考へられるのであります。それ
はこの釋迦様の四十何年の間の御說法といふもの
は、それ／＼價値の有るものには相違ないのであり
ます。けれどもこれは要するに方便の教に過ぎなか
つた。その事をこの無量義經に於て初めて打明けて
説かれたのでありますから、さういふ意味に於てこ
の無量義經の『四十餘年未顯眞實』といふ言葉は、
大變な深い意味を有つ譯であります。勿論方便の教
といふものがまるで價値を有たないといふことでは
ないのです。眞實の事が解つて見れば、方便の教を

明佛の時から佛がだん／＼出て、九代經つて釋迦
様がこの世に御出現になつたといふのであるから、
文殊は釋迦様の九代前からの師であると斯う申し
て宜しい。さういふ譯で法華經を説かない前には、
いつでも『不説一字』といつて、佛は一字も説いた
のではない、この自分の説くことは決して自分の説
ではないのだといふ風に言つて居らつしやる。これ
は今申すやうな理由に基くものである。だから若し
お釋迦様が法華經といふものをお説きにならなかつ
たならば、お釋迦様の本當に尊い所が解らないで、
一切の人間界、天上界の者が永くこれを仰いで師
とするといふことはなくて終つたに相違ないであら
う。

佛御年七十二の年、摩竭提國靈鷲山と申
す山にして、無量義經をとかせ給しに、
四十餘年の經經をあげて枝葉をば其中に
をさめて、四十餘年未顯眞實と打消し給

學んだといふことがそれ／＼價値を有つ、斯ういふ
事なのです。譬へば京都に行く汽車に乗つて、愈々
京都に着いて見ると、横濱を通り、静岡を通り、名
古屋を通つたことが皆役に立つて来る。併し京都に
着かないで途中で降りてしまへば、横濱を通つたの
も静岡を通つたのも、何の事やら譯が判らないこと
になる。それで究極の所まで修行が續きますれば、
その途中の一步々々の修行といふものは皆その價値
を有つて来る譯であります。それでありますから、
方便の教をつまらないものだと言ふのは、つまり眞
實の佛様のお心持を打明けられた教と結付かなけれ
ばつまらない、斯ういふ意味であります。それと結
付いて法華經が解つて、それから後に又モウ一遍振
返つて考へて見れば、いろ／＼な經の中に説かれた
事が皆それ／＼意義を有ち、皆それ／＼尊いものに
なるに相違ないのであります。さういふ意味で四十
餘年には未だ眞實を顯はさず、今まで自分が教へた

この教で止まつてはいけないぞ、そこからモウ一步進んで佛の本當の心持が解るまで修行を續けなければいけないぞ。斯ういふ意味に取れば宜しい譯であります。

併しさういふ事を初めて仰しやつたのでありますから、その事を伺ひました諸大菩薩・諸天人・菩薩とか或は天上界・人間界の者は、これは慌てたに相違ない。今まで習つたのがこれがお終ひだと思つたところが、今まで説いたのが眞實ぢやないといふことを言はれたのでありますから、慌てまして、「實義を請じ」それならお釋迦様の眞實の心持をお説きになるのはどういふ事かといふことをお尋ね申上げた譯であります。

無量義經にて、實義とおぼしき事一言ありしかども、いまだまことなし、譬へば月の出んとして、其體東山にかくれて、

想の善い行ひが出て来る斯ういふ意味であります。これはどうも人間が心を有つて居る以上は、その心の土臺が建直らなければ、一々の場合に於てそれが善い行ひか、それが悪い行ひかと言つて詮索をしたつて、昨日ある事と今日ある事と違ふのでありますから、昨日善いといふことが今日善くないかも知れない。學校で習つた事が實際の世の中に役に立たぬといふのはそれでせう。學校で修身倫理の時間に習つたやうな事が實際世の中に出て来ないのだから、斯ういふ場合には斯うしろと言つてもその通り出て来ない。それでその習つた倫理道德は殆ど役に立たない。それはその倫理道德の一つ／＼の場合だけを教へて、心の根本を教へないからです。心の根本に於て佛様のお心持と通ふやうな心持をつくつて居れば、その一々の場合に於て一々に適切な判断が出来るのであります。それが無量義は一法より生ずるといふことであります。一つ／＼の事を言へば際限

一四
光西山に及べども、諸人月體を見ざるがごとし。

ところがその無量義經の中に、お釋迦様の眞實の心持を打明けられたといふやうな事がたつた一言チヨット見えて居るけれども、まだ本當に深くはお説きにならなかつた。このチヨット見えて居るといふのはどういふ事かと申しますと、これは無量義經の中に、

無量義とは一法より生ず。其の一法とは即ち無相なり。

斯うある。これがお釋迦様の眞實のお心持の一部分をお示しになつたものと言はれるのであります。「無量義」といふのは有ゆる人生の問題を解決してさうして世の中に立つて本當の正しい行ひをするといふ根本の心懸けであります。それは「一法より生ず」一つの根本の事を知るといふことからその理

がないけれども、併し根本から言へば、自分の心持が佛様と通ひ合ふといふことがそれが土臺だ。その土臺をしつかりと立て、置けば、一つ／＼の場合に於ての善い行ひといふものは、皆その中から出て来る。斯ういふことであります。

それならばその一法といふのは何だ。それは「無相」である、無相といふのは別の言葉で言へば平等大慧といふことです。佛様が絶対の慈悲を以て一切の人の心の中を照し見て、さうして總ての人に適切なる教をお與へ下さるといふことが平等大慧であります。その平等大慧といふ上から言へば無相であります。無相といふのは差別の相無しといふ意味であります。人間は總てを差別して居ります。智慧の有る人智慧の無い人、身分の高い人身分の低い人、金の有る人無い人、世間の勢力の有る人勢力の無い人といふやうに差別して居るのであります。その世間的の差別がどれだけの意義を有つて居るかといふ

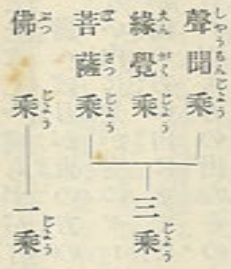
ことを考へて見ると、皆それは一時的のものでせう
富んだ人がいつまでその富を持続けることが出来る
か、これは二十年か三十年経てば消えてしまふ。勢
力を有つて居る人がいつまでその勢力を持続けるこ
とが出来るか、これも暫く経てば消えてしまふ。智
慧の有る人と言つたところで、人生のいろ／＼な事
に就て有つて居る智慧は、世の中の變化に依つて消
されてしまふ。だからさういふやうな差別といふも
のも、それは現實の世の中を越えて行く上に於て必
要ではありませんが、その差別に執はれてはいけな
い。こゝはチヨツト間違へてはいけない、差別が無
意味だといふものではありません。差別に執はれては
いけないといふことです。成程智慧の有る人が智慧
を以て人を導いて行くといふことは善いことです。
の有り人がその富の力で世の中に貢獻して行くこ
とといふことは善いことです。だから差別はいけないと
いふのではない。併しその差別に執はれて、今まで

慈悲の心持を本にして、銘々も自分の修行を勵むし
の者をもさういふ心持で導いてやらうといふこ
と、それが所謂無相といふことであります。
さういふ事を無量義經の中に説いて居りますから
部分に佛様のお心持がそこに打明けられてあ
ると思へる。けれどもまだ佛様のお心持がスツ
カリ打明けられてあるとは思へない。だから「いま
だまことなし」残らずが打明けられてあるとは思へ
ない。譬へば月が東の方の山から出ようとして、月
の出ない内に光が空にポツとさして来るから、そ
の光が西の方の山にまで及んで西の方まで明るくな
る。けれども月の出たそのまん圓な形を見なければ
まだ本當に月が出たといふ感じは起きません。それ
と同じやうに、無量義經の中に、一切の善い行ひは
一つの心の持ち方から出て来るといふことだけは説
かれて居るけれども、その心の持ち方は何だといふ
ことはまだハッキリ言はれて居ない。ちようど月の

勢力の有る者が永久に勢力が有ると思つたり、今ま
で成功した者がいつまでも成功して居ると思つたり
する、それがいけないと言ふのです。結局人間とい
ふものは皆佛性を具へて居るのであつて、修行を積
んで行けば同じ所に行けるのだから、そこを見透し
て、さうして眼の前の差別は、無意味とは言はぬが
その差別に執はれることを捨てなければいぬ。斯
ういふのが所謂平等といふ意味であります。平等と
いふと何でも皆平等に行くかと言へばさうではな
い、差別の中を通つて平等の所に行かなければなら
ない譯であります。そこを能く見極めて、佛様が教
をお説きになるのが、それが所謂方便の教でありま
す。方便の教といふものがまるで無意味ではない。
けれどもその方便の教に依つて行き着く先は所謂一
法であります。即ち人間は皆平等だ、皆佛性を具へ
て居るのだから、皆教へ導いて結局佛の境界に到
達するまで導いてやらうといふ、この佛の廣大な

光がポツとして居るけれども、月そのものを見な
いやうなことあります。
法華經方便品の略開三顯一の時、佛略し
て一念三千心中の本懐を宣給ふ。始の事
なれば、ほと／＼ぎすの音を、裏をびれた
る者の一音きゝたるがやうに、月の山の
半を出たれども、薄雲のをほへるがごと
くかそかなりしを、舍利弗等驚いて、諸
天・龍神・大菩薩等をもよほして、諸天・
龍神等其數恒沙の如し、佛を求むる諸の
菩薩大數八萬あり、又諸の萬億國の轉輪
聖王の至れる、合掌して敬心を以て、具
足の道を聞かんと欲す等とは請ぜしなり
文の心は四味・三教・四十餘年の間いまだ
きかざる法門うけ給らんと請ぜしなり。

ところが無量義經に續いて法華經をお説きになる場合に於て、法華經方便品の中に「略開三顯一」といふことが説かれてある。「略して三を開いて一を顯はす」といふのですが「三」といふのは三乗のこと、「一」といふのは一乗のことです。



「聲聞乘」といふのは、世の中の無常を感じて、世の中の小さい利害損得等に執はれないやうな心持をつくる爲の教であります。「緣覺乘」といふのは、更にさういふ教を、自分の毎日見たり聞いたりする事實に思ひ合はせて、一層深く世の中に執はれない心持をつくらう、斯ういふのであります。それから「菩薩乘」といふのは、更に進んで世の中の惱める

の大目的を達する爲にさういふ教を説かれたのだ、斯ういふ意味であります。それが三を開いて一を顯はすといふことです。これは法華經の方便品、譬喩品等に於て能く明かにされて居る譯であります。茲に氣を附けなければならぬ二つの事柄があります。一つは究極の所を見極めなければならぬといふことで、何の爲に吾々は佛教を信するのだ、それは自分が佛の境界に到達するといふこの大きな望みを達する爲だ、斯ういふことが一つでせう。けれどもその自分達が佛に成るといふ目的を達する爲には一足飛びに行かないのだから、眼の前の凡夫の境界から一歩々々と進んで行かなければならない。斯ういふ事も必要ナンです。そこが二つの條件を片手落ちしてはならない。禪宗の方で言ふ見性成佛といふやうなことも宜いけれども、ウツカリすればいきなり佛様に成るといふやうなことを考へてしまつて、一歩々々と堅實に運んで行くといふ方が疎かに

者、苦しめる者に對して同情を有つて、これを引張つて一緒に意義の有る生活に入れてやらう、斯ういふのであります。それは三種ある。けれどもその三種の教といふものが何の爲に説かれたのかといふとそれは佛乘の爲に説かれたのだ。一體人間は佛性を具へて、佛と同じになれるやうな性質を有つて居るのだから、その有つて居るところの所謂佛性を十分に發揮して行くといふと、現在はどうなつたらぬ者であつても、結局佛様と同じになれるのだ。その佛様と同じになる爲に、聲聞乘も緣覺乘も菩薩乘も説かれたのであつて、結局こゝに來て初めて今までの三つの教といふものが意義を有つたのだ、斯ういふ事が三を開いて一を顯はすといふことです。「聞く」といふのはその意味を説き明かすことでもあります。何の爲に世の中の無常を感じて居ることを説いたか、何の爲に慈悲を重んずるといふことを説いたかと言へば、結局人間が佛様と同じになるといふこ

なる。それから又佛の戒律を守つて毎日の生活を堅固にして行かうといふことも結構だが、その方に執はれてしまふと、いつまで経つても大きな理想といふものを捉まへることが出来なくなつて來るから、結局いゝ加減な所で終つてしまふ。いつでも高い理想を立て、さうして低い自分を見て、低い自分を高い理想に近づかしむべく努力をするといふことを忘れてはならない譯であります。その所がどうもどつちにか偏り易い、高い理想を有つて居る人はとかく夢を見てお終ひになる。現實の事は考へて居る人は、とかく小さい所にばかり執はれて、大きい所を見ないといふやうになる。それで今この所ではその事を能く言つてあります。無量義經に於ては斯ういふやうな一つの所に行くといふことを言つてあるけれども、それだけではまだいけない。人間が皆佛に成るといふことを考へても、佛に成る爲には、どういふやうな筋道を通つて行くか、どんな道

を歩いて行くかといふ、その一步步々進んで行く道が打明けられなければ、折角佛に成るといふその目標だけを掲げられても、それはあまり役に立たぬものになる。そこでどうしても法華經を説かれなければならぬ。法華經は、凡夫が一步々々と修行を積んで行つて佛の境界に到達するその道を紛れることなく説かれたものでありますから、無量義經といふものはどうしてもこの法華經といふものに續かなければならないといふことになるのであります。それを方便品の開三顯一といふ所で説かれた。

ところが、それだけでは終らない。何故なら、人々が佛と同じに成れると言つても、佛とは何ぞやといふことがまだ徹底的に説明されて居ない。佛といふのはどういふのが本當の佛であるか、これはまた方便品を中心とした迹門では解つて居ないので。ただ何だか皆が現在のこの凡夫の境界を離れて、あ

大師の説でありまして、つまり吾々の心の中に、自分を佛にするやうな尊いはたらきもあるし、自分を地獄・餓鬼・畜生界に墮すやうなつまらない性質も具へて居るといふことであります。これは法華經本門の壽量品に基いて立てられた説であります。さういふやうな後に至つて天台大師が一念三千といふ言葉で言ひ表はしたやうな眞實の意味をまだ十分に説いて居らつしやらない。方便品に於てはその一部分だけを説いて居らつしやるのであります。例へば時鳥の音を聴いても、ボンヤリして坐睡して居た者は、聴いたか聴かないか判らないやうな心持で終つてしまふと同じやうなことであります。又月が東の方の山から少しばかり出たけれども、空のまん中に懸つて居ない。その途中で薄い雲がこれを隠して居るものだから、月の光が十分に見えなかつたといふと同じことである。併ながら兎に角佛様が今まで説いた事は方便で、モツと深いものを説かうと思ふといふ

釋迦様御自身と同じやうな佛の境界に到達することが出来るといふだけナンです。マア譬へば東京驛で汽車の切符を買つて、京都に行けるかなといふだけの話です。京都はどんな所だか、これはまだ解つて居ない。だから何だか良い所へ行けるかなと思ふだけで、まだこれは頼りないのです。その佛といふものはどういふものか、佛の境界といふものは如何なるものかといふことを徹底的に説かれたのが、法華經本門の中の壽量品であります。だから壽量品の説法を得て、初めて佛とは何ぞやといふことが本當に解る。佛とは何ぞやといふことが本當に解つて、初めて自分達が佛に成る爲の修行がどんなものかといふことも能く解る譯であります。

それを今こゝに言つて居るので。方便品の中でも開三顯一といふことは大體言ふけれども、まだこれでは不十分だ佛様は大雜把には言つて居らつしやる。一念三千といふのは、前にも申したやうに天台

ことをお考へになつたので、それを御發表になつたのでありますから、そこで舍利弗達が驚いて、諸の天上界とか龍とか鬼神とか、その他の大菩薩などにも同意を求めて、「もよほす」といふのは同意を求めて、お釋迦様に對して、どうぞその眞實の教といふものはどういふものであるか、その事をスツカリ打明けてお話下さいといふことをお願申上げた。その時の言葉に、諸の天龍 神等、その數は恒河の砂の數ほどあると言つてありますが、これは皆佛の眞實の教を伺はうと思つて居ります。又今まで菩薩として大乘の教を修行した者も、結局は佛の境界に到達したいといふことを理想として居ります。その佛を求むるところの諸の大菩薩、斯ういふものもその數は八萬ほどある。それから又方々の國の國王、その國王の中に於ても、殊に徳の勝れて居る者が轉輪聖王だと言はれるのですが、斯ういふ轉輪聖王もこゝに大勢集つて居る。その大勢の者は皆誠

心を以て合掌して、佛を敬うて、佛に對して絶對に歸依する心持を表はして、さうして『具足の道を聞かんと欲す』本當に自分達が佛道の修行をして、何處まで行つたら佛の境界に行けるのだといふ、その徹底的の最後の教を聞きたいと思ふ。斯ういふことを舍利弗や何かお願申上げたのであります。

その意味は、四味、三教、四十餘年の間いまだきかざる法門を聴きたいといふのです。「四味」といふのは、前にも申上げたやうに、華嚴、阿含、方等、般若、この法華經を説かれる前の四つのもので、それから『三教』といふのは藏通別圓といふ四教の中のその圓を除いた藏通別、即ち小乘から大乘まで入る一通りの教、さういふ事をお釋迦様は四十年餘りにお説きになつたのであります。その四十餘年の間はまた打明けられなかつたお釋迦様の本心を、その儘現はされた教といふものはどういふものであるかその教を承りたい。斯う皆が願つたのである。

その具足の道といふことに就て、いろいろこゝに説明があるのであります。大經即ち涅槃經の中に『薩とは具足の義に名く』とあります。薩といふのは薩達磨で、支那の言葉に譯すと『妙法』とする。その薩達磨といふ言葉はいろ／＼な經典の中に見えて居りますが、要するに妙法といふ意味であります。その薩達磨の『薩』といふのはどういふ意味かといふと、涅槃經の中の説明に依れば具足といふ意味だ、萬事揃つて缺くる所なしといふ意味だ、斯ういふ意味であります。即ちこの方便の教を永い間お説きになりまして、結局眞實の教をお説きになつたのであります。その眞實の教をお説きになるならば、佛様のお心持は缺くる所なく、申分なくそこに發表されて居るのであります。それでありまして薩といふのは具足の義に名けるのだ。斯う言つてあります。

それから『無依無得大乘四論立義』これは唐の時

此文に欲聞具足道と申は、大經に云く薩とは具足の義に名く等云云。無依無得大乘四論玄義記に云く、沙とは譯して六と云ふ。胡法、六を以て具足の義と爲す等云云。吉藏疏に云く、妙とは翻して具足と爲す等云云。天台玄義八に云く、薩とは梵語なり。此に妙と翻す等云云。付法藏の第十三、眞言・華嚴諸宗の元祖、本地は法雲自在王如來、迹に龍猛菩薩、初地の大聖の大智度論千卷の肝心に云く、薩とは六なり等云云。

そこで皆が教を請うたその言葉に、具足の道を聞かんと欲すとある。「具足の道」といふのは、お釋迦様の心持をスツカリ打明けられた教、斯ういふ意味であります。

代に出ました坊さんで慧均といふ人の著述であります。その中には沙といふのは（薩と言つても沙と言つても同じことです）直譯すれば六といふ意味だ。「胡法」即ち印度の古い習慣から言ふと、六といふのは總てが具はつて居るといふ意味である。斯ういふ説明がしてある。

それから「吉藏の疏」吉藏といふのは唐の時代に於て出た坊さんであります。この人が法華玄論といふものを書いて居ります。その言葉に依りますと、薩といふのは翻譯して具足とするのだと言つてある。それから天台大師の書いた法華玄義の第八卷には薩といふのは梵語であつて、これは支那の言葉に譯すれば妙といふのだ。斯う言つてある。

それから「付法藏第十三」付法藏といふのは、お釋迦様の教を傳へるところの正しい系統に當る人々のことでありまして、その系統の十三番目に當つて眞言宗とか華嚴宗とかいろ／＼な宗旨の元祖である

ところの龍樹といふ人、これは一方からは龍、狂とも言はれて居る。これは本地を言へば法雲自在王如来といふ佛様であるが、それが一切衆生を惑れんで一切衆生を教へ導く爲に假に世の中に身を現はした。それが龍樹菩薩又は龍猛菩薩といふのでありますが、その龍樹菩薩の著述に大智度論といふものがある、こゝに「初地の大聖」とありますが、地といふのは、佛の境界に到達すべき見込がしつかり附いて、モウ何も疑ひないといふやうになつた所です。佛の教と自分と一致した所です。さういふ心持をしつかり捉まへたところの大聖、非常に勝れた人、即ち龍樹の事を言ふのでありますが、その龍樹の書いた大智度論といふものは、佛教の全體の一番大事なる所を書いたものである。その「千卷の肝心」千卷といふのは佛教の内容の非常に澤山なことに譬へた、その佛教の内容を要領よく説明したのが大智度論であるが、その中には薩といふのは六だと言つてあ

る。印度では六といふことを非常に尊んで、完全無缺といふ意味に使はれて居るのであります。

妙法蓮華經と申すは漢語なり。月氏には薩達磨分陀利伽蘇多攬と申す。

妙法蓮華經といふのは支那に譯した言葉であつて印度では薩達磨分陀利伽蘇多攬といふ。これは

薩達磨……妙法
分陀利伽……蓮華
蘇多攬……經

といふ意味です。この妙法蓮華經といふことの根本は「法」といふことです。

佛様の力の現れたものが法ナンでありますから、法といふものが根本であります。法といふことは一應を言へば教といふ意味であつて、モット深入りすれば絶対の眞理といふことでせう。人に教を與へら

れるといふことは佛様が勝手にさめた教ではないのであつて、人間といふことの本性を見抜いて教を與へられるのである。ところが人間は人間だけで生きて居るのでないので、地面を踏んで生きて居る、蒼い空に覆はれて生きて居る、山や川や、草や木や、鳥や獸や、有ゆるものと一緒に生きて居る。若し人間が人間だけ特別なものであつて、天地萬有と一致しないやうなものであるならば、一日でも一時間でもこの天地の間に生きて居ることの出来るものでない。さう考へると人間の爲には教といふものは必要だが、その根本に於ては、人間をも天地萬有をも總てを統一するところの、その絶対の理といふこの道筋を知ることが必要になつて来る、この理を知らな

私はいつでもさう思ふ。たゞ便宜的の、今の世の中を善くするには斯うやつたら宜い、眼の前の問題を解決するには斯うやつたら宜いといふ教は、それは便宜的の教である。人間といふものはどういふものか、天地萬有といふものはどういふものか、その絶対の理の上に立つた教でなければ、その教といふものは永遠の價値を有つて行く筈はない。併し早く效目を現はしたいと思ふと、その絶対の理などは考へないで、たゞ眼の前で斯うやつたら役に立つだらう、斯うやつたらうまく行くだらうといふことになつてしまふ。さういふやうな教は永い價値を有つて居るものではない。どうしても理の上に立たなければならぬ。

便宜なものになる。この理に依つて教が立つといふことを深く考へないから、教といふものが魔つて行くのではないかと

そこでその理といふものはどうして現れて来るかといふ時に、茲に初めて本佛といふ思想が現れて来るでせう。本佛の御力の現れたものがそれが絶対の理である。こゝ迄行かなければならぬ譯です。そ

ここでその本佛——壽量品に現れた「如來祕密神通之力」といふその如來といふものに對して、吾々は絕對に歸依する、斯ういふことになる。本佛の御力が現れて理になるのだ、理に基くものが教だ、斯ういふのだから、本當に教に歸依する以上は、その本佛といふ所まで行かなければ、その教の本當の價值は解らない譯になる。そこを徹底的に考へないで、今眼の前の出來事を教ふ爲の教だといふ風に考へて居るから、その教を説く上に於て弊害が起つて來る、いゝ加減に妥協的なものになつて行く。それは本當の教といふものの意味には叶はないのでありませう。

それで妙法蓮華經の「法」は教といふ意味だが、モツと深く申せば理といふ意味である。その絕對の理といふものは本佛の力の現れたものだ、こゝ迄徹底して行くのであります。その本佛の力の現れた理、その理を本にする教、その教といふものは一切の世の中の區別を超越するのでありますから、これ

を「妙」と言ふ。妙といふ字をどう解釋するか、こ

れは要するに一切の差別を越えるといふ意味であります。人間界のいろ／＼な差別に執はれない、人間界のいろ／＼な差別より以上の、モツと深い意義を含んで居るといふことが妙といふことでありませう。併ながらそれだけではまだ徹底致しませぬから、若し假に世の中の事でこれを説明しようとするれば、「正徧」です、正しくして總てに行渡る、斯ういふことであります。どうもこの妙といふ字の説明には私共も随分困つて居りますが、結局妙といふのは正徧といふことだらうと思ふ。正しくして總てに行渡るといふことに相違ない。それでなければ一切の人生の差別とか、いろ／＼なものを超えて行かれる筈はない譯であります。それが妙法蓮華といふことでせう。「蓮華」は、その妙法の最も勝れた最も美しい状態を、蓮の華を以て形容したといふことであります。蓮華の如き妙法である、妙法蓮華といふの

は、蓮華の如き妙法といふのであります。その蓮華といふことに就て、蓮の華はその華が咲いて居る時に既にそこに一緒に實があるからといふやうな説明もありますが、これは少しこぢつた説明になるのであつて、要するに蓮華を以て譬へるといふことは妙といふ意味を形容したもので、妙といふのは絕對のものである。即ち正しくして總てに徧く行渡る、斯ういふことでせう。それが薩達磨分陀利伽です。

それから「蘇多檀」といふのは「經」といふ意味であります。その經といふことをお互にしつかりと考へなければならぬと思ふ。經といふのは一應言ふと纏めて遺された教です。法華經とか阿彌陀經とか、華嚴經とか大日經とか言へば、これは佛の説かれたことを一纏めにして後へ遺されたもの、斯ういふ意味になりませうから、淺はかに解釋すれば、經といふのはすなはち言葉なり文字に依つて現はされた佛の教といふ意味です。ところが言葉といふものは限り

があるので、どんなに説明して見たところで、説明し盡せないものがあるに相違ない、況してこれを文字に表はすといふことであれば尙更であります。文字で逆も書けるものではない。だから言葉や文字といふものは、モツと深い方に打込むその手懸りに過ぎない、言葉だけ解つたら宜いといふものでない、文字だけ解つたら宜いといふものでない。言葉や文字を手懸りとして、言葉にも言へないやうな文字にも表はせないやうなものまで深入りして考へるといふことでなければならぬ譯であります。その事を法華經方便品の中に、唯だ佛と佛とのみ諸法の實相を知るのだ、これを言葉で言はうと言つても言へはしないのだ。文字で表はさうと言つても表はせないものでないのだ、併し言葉や文字を通らなければいけないから、言葉や文字を通つて行つて、さうして言葉にも文字にも表はせないやうなその深い所までしつかりと考へる、斯ういふ意味であるでせう。

だから經といふことは一應言へば文字に表はされ
た經であります、モツと深入りすれば、文字にも
言葉にも表はせないとこの佛の御精神を纏めて傳
へたもの、それが經といふことになるのでありま
す。でありますから、私共が法華經を讀むといふこ
とは、一應言へば法華經の一字一句を讀むことだが
モツと言へば一字一句に表はせない佛のお心持をし
つかりと捉まへるといふこと、それが本當の法華經
を讀むといふことでなければならぬ。その大きな
努力をしないで、たゞ字を讀んで、たゞ言葉を解釋
して、それで足れりとするといふことならば、それ
は本當の經を讀んだといふことにはならない譯であ
りませう。

日蓮上人は三十二歳の時から五十歳の御年まで、
法華經を弘めることに努力をされまして、その間に
有ゆる艱苦を冒し、有ゆる困難を冒して、さうして
結局佐渡に流されることになつて、その佐渡に流さ

分の身に實行して行くといふことになりまして、初
めて本當に經を讀んだといふことになるのでありま
せう。それを薩達磨分陀利伽藍多壇、斯う申すので
あります。

善無畏三藏の法華經の肝心眞言に云く、
曩謨三曼陀沒跋南歸命普尊三身阿阿暗惡
開示薩縛勃陀一切枳攬知娑乞菟毗耶見識
悟入薩縛勃陀佛 枳攬知娑乞菟毗耶見識
誡曩三娑縛空性羅乞叉偈離塵也薩哩達磨
正法浮陀哩迦華蘇駄覽經惹入呼遍鑊住
也 發歡縛日羅固羅乞叉輪護呼無願娑婆訶
決定。此眞言は南天竺の鐵塔の中の法華
成就。經の肝心の眞言なり。

善無畏三藏、これは支那に眞言の教を初めて傳へ
た人でありますが、この人が後に至りまして法華經

れた時に、初めて「日蓮は法華經を讀みて候」と言
はれた。これは非常に意味の深い言葉です。日蓮は
法華經を讀んだ、讀んだといふのはたゞ口で讀んだ
のではない、法華經の精神を捉まへたのだ、その精
神を捉まへて自分でこれを實行して、有ゆる艱苦を
冒して來たからこそ初めて本當に日蓮は法華經を讀
んだといふことが言へるのであるといふのであります。
マア私共のは實を言へば法華經を讀んで居はしない
のです。たゞ法華經の言葉や文字を幾らか辨へて、
その説明をして居るぐらゐなものであります、そ
の言葉や文字の奥に有るものをしつかり捉まへて、
これを信じて、これを實行して、初めて法華經を讀
んだといふことが言へるのであります。どうも毎
日讀んで居るのだ、五十年も讀んで居るのだと言つ
ても、上の空で讀んだのでは大した力にもなりはし
ないのであつて、その言葉や文字の中のモツと深い
ものをしつかり捉まへて、これを讀んで、これを自

の非常に尊いことを考へて、眞言宗の方では胎藏界
の曼荼羅、金剛界の曼荼羅といふものを二つ立てま
して、さうして信仰を勵むことを勵めるのでありま
すが、善無畏三藏は晩年に於てはその胎藏界、金剛
界の曼荼羅のまん中に法華經を置いて、さうして信
仰を勵めたといふことが傳へられて居ります。その
善無畏三藏といふ人が、法華經の一番大事なる言
業で言ひ表はしたといふのが、こゝに今出て居る眞
言であります、これは善無畏自身は書いて居りませ
ぬ。これは「覺禪集」といふ書物があります、そ
の中に傳つて居る所に依つて、今こゝに引かれて居
る言葉が後世に傳つて居るのであります。これは一
通り言葉の説明をして見ますと、「曩謨三曼陀沒跋
南」といふのは「普賢佛陀に歸命する」といふ意味
だと説明されて居ります。「普」といふのは、その力
が一切に及ぶところの佛様といふ意味であります。
それから「唵」といふのは、こゝに「三身如來」

と説明してありますが、要するに佛の慈悲と、佛の智慧と、佛の永き生命、この三つを含んだ佛様、斯ういふ意味であります。

それから「阿阿暗悪」といふのは「開示悟入」といふ意味です。「開」といふのは正しい教の意味を打明けて吾々に示されたこと、「示」といふのはその正しい教を更に詳しく吾々に示されたこと、「悟」といふのはその尊い教の意味が自分のものになつたこと、それから「入」といふのはその教に従つて自分が修行して、さうして凡夫の境界を離れるといふことです。この開示悟入といふのは、これは法華經の中にもありましたが、殊に大事な事であります。



譬へば斯ういふやうに部屋が二つあると假定して

れが示です。さうすると「成程この部屋は明るいナ」といふことに氣附く、「どうか斯ういふ明るい所に行きたいナ」と氣が附く、それが悟です。その明るい所に入りたいたいものだとなつて行つて内に入れば、それが入であり、斯ういふ風に教を與へるといふには、開示悟入といふ四つの所を通らなければ、本當に人を教へ導くといふことは出来な

い。そこで今この眞言の中に於て開示悟入といふことを言つてある。

その開示悟入するにはどうするかといふと「薩縛勃陀」即ち一切佛を「根擯」知るといふことであります。この凡夫の境界より違つたところの悟つた境界を知らせるといふことが大事だ又知らせるばかりではない。『婆乞菟毘耶』まご／＼と眼の前に見せるといふことが必要である。この「見る」といふことは、たゞ知るだけでは見るになりませぬ。知

一方の部屋は燈火が點いて居つて非常に明るい、片方の部屋はまッ暗だとして、その明るい部屋といふのは悟つた境界、暗い部屋といふのは迷つた境界です。吾々は迷ひだらけのもので、そのまッ暗な部屋に居る者を、どうして明るい部屋に連れて行かうかと言へば、今の開示悟入といふ順序に行かなければならぬ。先づこの間を少し開く、さうすると明りがこつちへさして行く、そこで初めて暗い所に居る者が「ア、明るい所があるナ」といふことに氣附く、それが開です。吾々凡夫の生活をして居る者に對して、お前達の生活が全部ではないぞ、モツと意義の有る生活があるぞといふことを教へる。これがちやうど暗闇に居る者に扉を開けて明るい所を見せるやうなものです。そこで「ア、思ひ懸けない明るい所があるナ」と氣附いたら今度は示です。「それなら此處へ來て御覽なさい」と言つて連れて來て内の様子を見せる、悟つた人の境界を教へてやる、そ

つて本當に打込んで考へて、成程こゝだナと解つた時に初めて見るといふことになる。だから見るといふことは知るといふことよりモツ少し深入りしたことです。佛様に就てもさうでせう。佛様を知るといふことは浅いことでありますが、佛様を見るといふことはモツと深いことです。佛様があると思つただけではまだいけない、佛様が本當に解りまして、佛を見るときは、佛と自分が佛と一緒に居るやうな氣分になる、それが佛を見るといふこと、知るだけではない、見るまでにならなければいけない、見るといふことは共に在る心持です。佛を見るといふことは佛と一緒に居るやうな心持になる。そこまで行かなければ信仰といふものは徹底したものではありません。知るだけならば、或る程度まで行けば知れますけれども、見るといふ、佛様と一緒に居るといふ氣分にはなか／＼なりにくい。そこに行つて初めて信仰といふものが本當の價値を有つのでありま

す。だから知るといふことの次には見るといふことがあります。

それから「誑誤曇三婆縛」これは「虚空の性の如し」とある、これは佛の境界を言つて居ります。虚空といふものは總てを覆ふのです、穢い所でも綺麗な所でも、高い山の上でも低い谷の底でも、虚空が覆はない所はありません。佛もその通りでありまして、善人でも悪人でも、智慧の有る者でも智慧の無い者でも、皆佛様は平等にお考へになり、彼等を皆意義の有る生活に入れようと思つて居らつしやる。これが虚空の性の如しといふことであります。

さういふ事が解れば「羅乞又懶」塵相を離れることが出来る、塵といふのは差別のことでありまして塵相といふのは差別相です。吾々は始終差別をして居る、その差別は自分に近いとか遠いとか、愆意であるとか疎いとか、損がある、得がある、そんな差別をして居る、佛様の本當の境界が解つて見ると、

は大事であります。入つて、遍く知つて、住して、歡喜する、佛の教の中に自分の身を打込んで、その次にその教を缺點の無いやうに辨へて、それからその法華經の中に落着いて、この外に出ない、この教の外には出まいといふ決心をして、そこで初めて歡喜の心持が起さる。ア、有難いな、この教に依つて自分は一生を終る、斯うなる、そこで初めて「縛曰羅」堅固です。その信仰がしつかりと固つて、途中で搖がないといふことになりす。

そこで「羅乞又給」これを擁護するといふことになつて来る。この順序は非常に宜しい、その教の中に入つて、それからスツカリ解つて、その信仰の中に落着いて、さうして歡喜の心持が出来て、自分の信仰がしつかりして、それからその教を護つて世の中に弘めようといふ決心が附く。これは吾々の信仰生活を實に能く細かに分けて居るのです。確にこの順序でせう。その深く入るとか、これに歡喜を感ず

さういふ差別相を離れることが出来る。

それは何が本であるかと言へば、「薩哩達磨」すなはち「正法」佛のお與へになつた正しい教といふものが本である。その佛のお與へになつた正しい教といふものは、「浮陀理迦」白い蓮の華の如く美しいものであつて、その美しい教が「蘇歌覽」經といふものになつて、纏つて後の世に傳はるのである。

だから「惹」入といつて、その教の中にスツカリ打込んで、自分の心の力も身の力も打込んで、さうして「呼」遍といふ、即ちその教の眞實の意味を偏らないで、その全體をしつかり自分のものにする。さうして「發」といつてその教の中に住する、たゞそれが有難いと思ふだけではいけない、その有難いと思ふ教を自分のものにして、その教を始終實行しようといふやうな落着いた氣分になることが必要である。

こうなれば「發」歡喜の心持が起さる。この順序るといふことを飛ばしてしまつて、教を弘めて世間に……といつても、それは無意味です。甚だ惡口を言ふやうですが、この頃佛の連中は、そこを飛ばすからいけない、深く入ることも知らず、それを喜ぶことも知らないでこの佛教を世界的に弘めようと云つてもどうして弘めるか、自分の心に信ずることもしない、自分の心持に喜ぶこともなくしてこれを世の中に弘めようといつても、出来る筈はありません。本末を顛倒して居る話であります。この順序は實に良い順序であります。

さうなれば「呼」これは前に申した「空」といふ意味であつて、空であれば隨て「無相」であり「無我」である。無相といふのは一切の差別の相を超越して居ること、無我といふのはモウこれ以上に進むべき望みを立てる必要がない、絶對の理を知つて本當の覺りを得て居るからこれで満足する、これ以上には何も求める所はない。斯ういふ意味であります

そこで「婆娑訶」決定成就、この佛の教といふものが必ず世の中に弘まつて、これがしつかりともものになる、成就するのであります。

斯ういふことをこの善無畏三藏の説いた法華經の肝心たる真言の中に言つて居る、これこそは本當に徹底的の説明である。この真言は南方の天竺の鐵塔の中から出た教に基いたといふことである。

ところがこゝが大問題なのです。南天竺の鐵塔の中から出たといふのは、真言宗の方で大事にして居るところの大日經、蘇悉地經、金剛頂經のこの三つの經が、南天竺の鐵塔の中から永く秘されて居つたのを世の中に見附け出した、それが龍樹菩薩、真言の方では龍猛菩薩と言ひますが、この人のはたらきだと言はれて居るのであります。ところが日蓮上人の立場から言ふと、その南天竺に秘められて居つた大日經、蘇悉地經、金剛頂經といふものも、法華經の中に説かれた真理の一部分を示したものに過ぎな

れたものは、今の善無畏三藏の真言だ、斯ういふのであります。斯ういふ事を洵に無難作にスラ〜と書いて居られる所に、日蓮上人の主張の非常に偉大なことが能く解るのであります。

斯ういふ譯で何と言つてもこの妙といふのは具足するといふ意味で、具足するといふのは佛のお心持をスツカリ打明けられたものだ。斯ういふ事を能く捉まへてこの法華經を讀んで見ると、この經の中に打明けられた佛の教が如何に廣大なものであるかといふことが解るといふことを斷定された譯であります。

(第二十講了)

x x x

日 蓮 宗

い、斯う斷定するのです。だから南天竺から見附け出された真言の三部經典といふものは、要するに法華經の中に入つてしまふのだ、法華經の一部分より外ならぬ、斯ういふのです。だからこれは極く短い言葉ですが、教義上から言へば大變な斷定ナンであります。真言宗の方で言へば、法華經よりは日蓮經の方が上だと言ふでせう。日蓮上人の方で言へば、ナニニ大日經と言つたつて、それは法華經の中に説かれて居る一部分に過ぎない。斯う言ふのでありますから、洵に無難作にスラ〜と書かれて居ります。これは大變な教義ナンです。こゝが決定しなれば、真言宗と法華經の方との争ひが決定しないことになる。日蓮上人のお考で言へば、南天竺の鐵塔の中から出たといふ真言の三部經といふものは、要するに法華經の中の教義の一部分に過ぎない。だから真言の方の肝心といふのは、要するに法華經の大事なる所を言つたに過ぎない、それは真言に現はさ

小林一郎先生述 勝鬘經講義

布裝上製函入菊判七八〇頁
定價 金參圓五拾錢
郵送料 貳拾貳錢

聖徳太子が、法華經と維摩經と此の勝鬘經を講述された有名な經であるが、一般には六かしとせられて居た。今度小林先生獨特の講述で誰れにも飲んでその深い意義を會得出来るやうにされたことは洵に有難い事である、是非御精讀あらんことをお薦めする。

晋文館發行

東京市四谷區内藤町一
電話 四谷 七七七五
振替東京六二二番

日蓮宗概観

(其十二)

故梶 木 顯 正

二、三寶の調和

三寶とは佛・法・僧の三を言ふ、即ち日蓮聖人は、
 一、本佛……久遠實成之恩教主釋迦牟尼佛
 二、本法……南無妙法蓮華經
 三、本僧……本化上行等の四大菩薩

この三者を俗に三寶様といふ。以上の三寶は先に云ふ所の本門の本尊の中心主體で、吾れ／＼が勸請し奉る云云と言ふのは委しく言へば斯うなる譯である。其處で順序として三寶の一一に付いて簡單に會解をすれば、

本佛であるが、是の本佛とは御本尊の中心主體で同時に亦吾等衆生の絶對的歸依所で、若し之れなかりせば宗教と云ふものではない、それ程に宗教として大事中の大事である。所が之れを南無妙法蓮華經だと云ふ人が有る、即ち之を妙法本佛論者と云ふ。これに對して釋迦牟尼佛だと云ふ人が有る、之れを釋迦本佛論者と云ふ。然かも未だ此の兩者の何れが眞かを門下ではハツキリさせてゐない。其の代表的な人を挙げれば清水龍山・田中智學の兩氏は妙法本佛論者(多少違つた點があるに)故本多日生上人は釋迦本佛論者だと云ふ。そこで壽量品に於て違佛始成

(人間釋)の釋迦如來の上に開述顯本して(開述顯本とは、「述を開いて本を顯す」と云ふので、人間の人格を開いて絶對的佛陀如來覺者としての資格を顯し、次には人間としての有限の壽命を資格としての佛陀無限の壽命の上に開き來る、即ち時間の有限を開いて無限を開き來る事である。だから釋迦如來の人格が開述顯本した爲に佛格資格と成つたのであり、今一面は限り有る壽命が限り無き壽命と成つた譯であるから、本佛とは釋迦牟尼佛の眞の釋迦牟尼佛と云ふ事である、之れを古來久遠實成之恩教主釋迦牟尼佛と呼ぶ。然るにそれを、さうでは無い、開述顯本したから人格の釋迦如來が南無妙法蓮華經と成つたのだ、と云つて開述顯本しても未だ用の釋迦如來、體の本佛妙法蓮華經だと云ふ。何うも此の二ツの意見の中で後の方が眞か、前の方が無理かと云へば、前の方が眞で後の方が無理のやうである。何故ならば開述顯本した以上は釋迦如來の上では有限は無限であり、人格即資格の佛でなくてはならぬ。して見ると體の佛、用の佛とは開述顯本した釋迦如來の上で論すべき事ではなくて、本佛釋迦如來對十方分身の諸佛の上で論すべき事である。それを已に開述顯本した本佛釋迦如來の上まで持つて來て論じやうとならうか、讀者如何となす?)無限の壽命と共に無限の大慈悲を持つた釋迦牟尼佛が無始實在の佛と成つて、吾等の上に主なり、師なり、親なりと云ふ三徳を以つて此の土有縁の如來として在ます、之れを法華經譬喻品に

而今此處諸患難多唯我一人能救護爲……師の徳

と、説いてある。又壽量品には「我常之、娑婆世界在」と云つて久遠の昔より已に吾等世界衆生の主として居ます事を明し、「常法説教化」として無始より已來の師である事を教へ、「我亦世、父諸、苦思、救者」と云つて無始常住の親たる事を明し給ふ。日蓮聖人は祈禱抄に「佛ハ人天ノ主、一切衆生ノ父母ナリ」と釋されてゐる。然るに之れを本佛とは南無妙法蓮華經だと云ひ、或は南無妙法蓮華經は、釋迦牟尼佛の御法號だと云ふのは脱線ではなからうか? 此の本法の意義と相比べて能く能く味讀すべきであらうと思ふ。

今此三界皆是我有……主の徳
 其中衆生悉是吾子……親の徳

次に本法であるが、之れは先きにも云ふ如く、南無妙法蓮華經を指す。然しながら此の南無妙法蓮華經には、古來から二様の解釋があつて一つは法即ち

(宇宙)の眞理と云ふ意味で、此の方の解釋から云ふと三千の諸法則ち宇宙のアリノマ、ノ相が妙法蓮華經だと云ふ事に成つて、差別界と平等界とを包んで居るものが妙法蓮華經なりと云ふのである。之れを專門語で言へば「十界十如權實因果不二の法」と云ふ、十界とは地獄界より佛界に至る迄の十通りの世界を指し、十如とは相・性・體・力・作・因・緣・果・報・本末究竟等と云ふ十通りのもので、之れは凡ての物のはたらきの關係を云ふ。權とは假りとして現象を言ひ、實とは實體として本體を指す。因とは種として原因を云ひ、果とは實即ち結果を云ふ。而して是等は皆不二の法である。云ふ、言ひ換へれば因を離れて果は無く、現象を離れて本體は無いと云ふ事を不二と云ふ。これを更に不二にして亦二なりとして「二而不二」と云ふ。妙法蓮華經の相と云ふのはそれである。

二の方は教法として解釋する方で、それは前にも云ふ如く「衆生を救ふ教」として妙法蓮華經を見る

セバ悲母ノ食物の乳トナリテ赤子ヲ養フガ如シ。今此ノ三界(娑婆)ハ皆是レ我有ナリ其中ノ衆生ハ悉ク是レ吾子ナリ等云云 教主釋尊ハコノ功德ヲ法華經ノ文字トナシテ一切衆生ノ口ニナメサセ玉フ。赤子ノ水火ヲ辨ヘズ毒ト藥トヲ知ラザレ共、乳ヲ飲メバ身命ヲツナグガ如シ云云

と、會解さ遊ばされて居る、其處で之れを救ふ佛様と救はれる吾等衆生との上に考へて來ると、佛は教ひ手、妙法蓮華經は救ふ綱、吾等の信心はその綱を握る手であると云ふ事を明された文面であることは至極 明かである。此處で考へねばならぬ事は、宗教は學問では無くて、信仰だと云ふ事である。先の眞理と云ふ冷たい理屈が、佛即ち如來の「慈悲」と云ふ暖かい人格の中で、乳となり教法となつて迷へる吾等衆生の上に與へられやうとして居る、それが妙法蓮華經である。云ひ換へれば佛の外に別に存する眞理は、學問的な冷たい哲學で、情も無ければ慈悲

のである。持法華問答抄に聖人は譬へバ高キ岸ノ下ニ人アリテ登ルコト能ハザランニ、又岸ノ上ニ人アリテ網ヲ下シテ此ノ網ニ取リツカバ我レ岸ノ上ニ引登サント云ハンニ、引人ノ力ヲ疑ヒ、網ノ弱カラシテ事ヲアヤブミテ手ヲ納メテ之レヲ取ラザランガ如シ、爭カ岸ノ上ニ登ル事ヲ得ベキ、若シ其ノ語ニ隨ヒテ手ヲ延べ之ヲ取ラシニハ即チ登ル事ヲ得ベシ。唯我一人能爲救護ノ佛ノ御力ヲ疑ヒ、以レ信得入ノ法華經ノ教ノ綱ヲアヤブミテ決定 無有 疑ノ 妙法ヲ唱ヘザランハ力及バズ、菩提ノ岸ニ登ル事難シ、不信ノ者ハ墮罪泥梨ノ根元ナリ云云

とあつて、妙法蓮華經は佛の衆生を救ひ玉ふ綱となつて居る。して見ると前に云ふ様な眞理といふ如き冷たい理屈ではなくして、暖い功德の(教)ツナである。又聖人は、佛ノ御功德ヲバ法華經ヲ信ズル人ニ譲リ玉フ、例

も無い、從つて目的も判然して居らぬが、佛の大慈悲に包まれた即ち佛の悟りの内容となつて居る眞理は、も早や眞理そのものではなくて、衆生を救ふと云ふハッキリした目的を持つ所の乳・教と成つて終つて居るものである。即ち佛と法とは全く一ツに成つて終つて居るのである。丁度學校の先生と教とは一ツであると同じ事で、これが先生は先生、教は教で別に成つてゐると云ふ事になつたら、中には教を持たぬ先生が出来ることになる、若しさうなつたら一體先生は何を以つて生徒を導くか、少なくとも先生にして教を持たぬ先生は無いと同様に、慈悲教法を持たぬ佛と云ふやふな佛は絶対に有り得ない、して見たならば妙法蓮華經とは聖人が「法華一部の功德は只妙法蓮華經の五字の内に籠れり」と仰せられるが如く、功德珠であり、良藥であり、教法であると云ふ事にならなければならぬ。

それが今日まだお互ひの間に「妙法蓮華經が佛だ

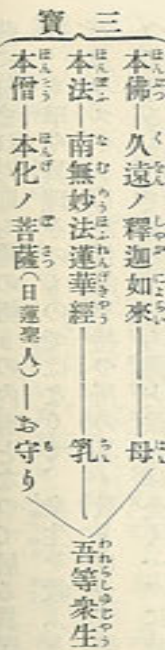
か教法だかハツキリして居らぬ」と云ふのはボンヤリした話である。之れはお互ひにハツキリと、妙法蓮華經とは佛の悟り玉ふた法にして、即慈悲の教法良薬なりと意識して、淳々と明し玉ふ大聖人の御教誡はよく心肝に染めて味はねばならぬ。

次に本僧とは、一番最初佛様に依つて導かれたお弟子、と云ふ事で、「本化の僧、本化の菩薩」とも云ふ。本佛釋迦如來のお弟子は非常に澤山あるが、其中の一番秘藏弟子、職人で云へば仕事の上に秘傳奥の手、極意皆傳の免許を得た人を云ふ、それがこの本僧即ち本化の菩薩である。末法濁惡世に出て法華經を弘めるには大困難・大迫害がある、それ等の大難を能く堪へ忍ぶ者は、此の本化の四大菩薩の外には無い、と佛自ら御定になつて居られる方々である。其の四大菩薩の上席に居られる方が、一名上行菩薩で、その方が末代惡世に日蓮聖人と御生れに成つて、文字通りの不惜身命で法華經を弘めら

れたのである。(之れを本化上行の)それは法華經に説く處の經文と、日蓮聖人の御一生とが、寸分違はず符合して居るからである。

本僧とは委しく云へば「本門の僧寶」といふ事で、本佛の本懐經を、夜も晝も忘れずに護り弘めて、佛の手となり足となつて衆生濟度の爲に活動かれる人を云ふ。日蓮聖人が本化上行の再誕であると云ふのは此の意味からである。

其處で以上この三寶が相の上では一往別々であるが、これが本門の本尊の上では調和して一體(委は別なつて居る)と成つて現はれて居る。故に三寶の調和に就いて述べる事とする。之れを圖に示すと



となる、でこの佛たる久遠の如來には、本願力と云

つて根本から持つて御座る一ツの大誓願がある。此の大誓願が動いて始めて本法の本願力と云ふ衆生を濟度する能力が現はれて来て、衆生を救ふと云ふ事になるのであるが、それ等の佛の大悲願なり教法の利益効果なりを吾等衆生の上に持ち來らしめるには其所に之れを指示し教へ玉ふ仲介者即ち人が無ければならぬ、この役目を爲し玉ふ方が本化の菩薩である。論語に「人能ク法ヲ弘ム、法ノ人ヲ弘メルニハ非ズ」と有る如く、この本僧即ち菩薩に依つて實際に活動して來るのである。されば吾等と佛との間に立つて教はれる事を教へて、如來の大慈悲を吾等に自覺せしめ玉ふ方は此の菩薩である。日蓮聖人は本尊抄に毒量品のお教をお示しになつて、

今ノ遣使還告(佛が使を遣はして)ハ地涌也(地涌とは本名)是好良薬トハ壽量品ノ肝要タル南無妙法蓮華經是也、此ノ良薬ハ佛猶迹化に授與シ玉ハズ、(迹化とは後に教へた弟子を云ふ、今この大事な使であるからさ様うな弟子には申しつけないで本化の菩薩に申しつける、との意)

と明された。故にお互ひは此の關係順序次第をよく心得て信仰心即ち信念力を發揮する處に、如來の本願力と妙法蓮華經の本願力と結び付いて御利益を惠まれる事となるのである。これを感蓋相應感應道交と云ひ、三力合成の信仰と云ふ。丁度それは善き火打石と、善きホクチと、善き火打金との三ツが揃つてカチツト打てば火が出ると同じだと、大聖人はお説きになつて居られるのである。

X X X

無窮の子

木田芳雄

まことに國家こそ、人間完成の道場であらう。法華經の中

に
當に知るべし、是の處は、即ち是れ道場なり。諸佛此に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得、諸佛此に於て法輪を轉じ、諸佛此に於て、般若樂したまふ。

と説かれて、諸佛とてもこの地上に人間として生れ、様々な苦行を積んで、人間の道を感じられ、他の迷へる人々に法華經を説かれて眞實な道を開かれた事を述べられ、更に涅槃を示されて身を以て教訓を垂れられたのである。されば吾人は至心に此の妙文を愛敬するとき、諸佛と自分と近いものと思はれ、懐しい思慕にひかれて眞我の欲求は上行へ、上行へと進み行くべきである。殊に日本國に生を托する我等にとつて切實にこのことが感ぜられる。彼のプラトーンが理想の國家を説いて

國家は諸徳を包容し之を統一する最高の善なり。

と仰せられ又其御結びとして

汝憶能朕カ志ヲ體認シ相率テ私見ヲ去リ公議ヲ採リ朕カ業ヲ助テ神州ヲ保全シ列聖ノ神靈ヲ慰シ奉ラシメハ生前ノ幸甚ナラン
と仰せられたのである。自分は日々此の御宸翰を拜讀して思はず感涙にむせぶのである。殊に

天下億兆一人モ其處ヲ得サル時ハ皆朕カ罪ナレハとの御宣布に對し奉るとき人間たるもの……殊に帝國臣民たるものは胸もつぶれるばかりの感激を覚ええないものがあらうか。この感懐は日日壽量品を讀誦して

毎に自らは是の念を作す、何を以てか……

の御文に至るとき思はず聲がふるへる時の心情と一味なものに感ぜられる。自分の如く心渴れる不孝者でも思はず感泣するのであるから、報恩感謝の生活を送つてゐられる臣民がこの大御心を體認されたら、どんなに感ぜられであらうかと思はれた。昔の忠臣が身命をなげうつて國恩に報ぜられた心境も推せられるのである。大補公一家も、和氣氏も、菅公も、日蓮聖人も皆是御列聖の御慈愛に感泣して思はず國恩に報じたまで、その生々しき御苦行も感激に充たされた大遊樂であつたらうと思はれる。

さればこそ大補公兄弟も死にのぞみ七度此世に生れて國賊を滅さん

とあるが感歎の至りである。そして今更に人間こそ小國家なりとの感を深めるのである。まことに皇國こそ諸天によつて護念せられた本國土である。人間最高の理想を實現すべく豫定された榮光に輝く聖國である。そして人間が……萬物が……本懐を遂ぐべき唯一の道場であらう。吾等は幸甚にも日本國に出生した、さればこそ法華經にもあひ得たのである。無窮の子として、無窮の國に生れ、無窮の道を進んで人間の本懐を遂ぐべきである。吾等は心から國恩に感ぜねばならぬではないか。

明治天皇の億兆安撫國威宣布の御宸翰の中に

今般朝政一新ノ時ニ膺リ天下億兆一人モ其處ヲ得サル時ハ皆朕カ罪ナレハ今日ノ事朕自身骨ヲ勞シ心志ヲ苦メ艱難ノ先ニ立古列祖ノ盡サセ給ヒシ踪ヲ履ミ治蹟ヲ勤メテコソ始メテ天職ヲ奉シテ億兆ノ君タル所ニ背カサルヘシ

と誓を立てられ、雪中、食もとばしき日蓮聖人が

當世日本國に第一に當める者は日蓮なるべし。
と喝破せられたものであらう。是等の忠臣が御列聖の御使として、その大御心を體認し、不惜身命、不孝者の窮子を誠實して無窮の道を開き、大直道を守護したればこそ日本國は無窮に進み行くのである。我等とても又同じ臣民の一人である以上祖先忠臣の心を吾心とし、大御心を體認して皇運を扶翼し奉らんとする勇躍を覚ゆるは極めて自然の情であらう。

殊に吾等青年が活目すべきことは、無始以來我民族の血統の中に脈うつて來た國家の理想が今正しく生々しき現實とならんとしてゐるといふ一事である。そして第一歩は力強く踏み出だされたのだ。八紘一宇！八紘一宇！と少年の言の葉にもうたわれて來た時勢となつたではないか。今正しく是れ其時なり。機運は刻々に熟しつゝある。然して皇國こそ人類の國家たるべき天業を護念せられたる大和日本である。この上は唯本來の使命を完全に遂行するのみであらう。我等が思ひを潜めて大日本の國性を思ふ時、法華經の眞核は自然に知見し來るべきである。妙法と國體とがうなづきあつて冥合してゐるからである。今こそ全世界が果して南無大日本帝國！南無大日本帝國！と我が皇國に向つて合掌してはゐないであらうか。無聲の聲は、眞實の叫びは法界に充滿して來た。混亂又混亂、諸佛の方便は人間の放逸を打破つて上行へ上行へと

牽き行く。苦惱は覺醒をうながし、覺人はひたむきに上行へと進む。統一へ！最高善へ！と合掌して進む時のみ人間は心の安住所を見出すのだ。今こそ日本國の光は輝き始めた。いや光を受け入れる力が人類の心に新しく萌え出でたのかも知れぬ。

新興ドイツの總統ヒットラーでさへ、日本國の御國體に合掌して南無大日本の一語をもらされたと聞く。ムツソリーニのイタリーだつてさうであらう。三國防共樞軸は單に政治的意味の結合のみではない筈である。これは人類上昇への推進力だ。自分がかく洞觀する。彼の厚顔なスターリンのロシヤも羨望と嫉視で身を焼かれてゐることだらう。恰も窮子が慈父の教誨に違つて禽獸に同するの生活に著するの類である。英國だつて、米國だつて、フランスだつて皆さうだ。まことに哀愍にたへないことではないか。されば今こそ無窮の子がその本務を自覺して奮起すべき秋である。十方の世界が大日本國に向つて合掌するの時が来た！全世界が久遠實成の大日本國に不孝者の罪を詫びながら還集すべき秋が来た！天地が新生して日本國の分身となるのだ。

この時にこそ十方世界が通達無礙にして一佛土の如くになるべきである。さればこそ

日蓮上人も日本國の尊嚴を

戒壇とは王法佛法に冥し、佛法王法に合し、王臣一同

復た教誨すと雖も而も信受せず

と。御列聖の法華經の、眞我の、御教誨に乖きたてまつつて

ゐた我等人類はナンとした不孝者であつた事よ、

億兆一人モ其處ヲ得サル時ハ皆朕カ罪ナレハ……

と拜讀する毎に一句一句自責の涙をこぼさないでゐられようか。

諸の欲染に於て貪著深きが故に

如何に吾人は不孝に不孝を重ねて上 陛下の大御心を

め申し上げてゐる事よ。

悔過自責！今こそ奮進の時である。大なる懺悔は大なる力

を生むであらう。そして常住にこの地上で説法せられてゐる本

佛の御聲を感得するに至るであらう。かくてこそ近代文明の

行詰りを打開すべき道は開かるべきである。放逸に浮身をや

つした徳川三百年もすぎ、明治御神政の勇猛あり、無慚にも

他方の菩薩の御世話にまかして西洋文明に心酔した大正の御

代もすぎ行き、今こそ昭和維新は到来したのである。

果然天地は震動した。本佛の御聲が我等の耳朵をうつたの

である。

今正しく是れ其時なり

と決定して大乘を説かれたのである。そして無窮の子の奮起

をうながして

止ね善男子。汝等が此經を護持せんことを須るす

に三祕密の法を持ちて有徳王覺徳比丘の其昔を、末法濁惡の未來に移さん時、勅宣並に御教書を申し下して靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべきものか、時を待つべきのみ、

と喝破せられ

大梵天王も帝釋も來り下つて踏み玉ふべき戒壇なり。

と呼ばれたのである。

時を待つべきのみ

の御文を深重に拜すべきであらう。かゝる最勝の地大日本國に妙法が建立すべきこともひとへに上 陛下の御稜威の至すところである。實に我等が 天子様こそ人類の主師親具徳者であらせられる。三界の御統率者であらせられる。今こそ萬民は胸底から湧出する歡喜を以て

天皇陛下萬歳！

と叫ばざるを得ないであらう。そして思はず法華經の妙文を拜せないわけにはいかぬ。我等が喜悅の心に經卷を抱いて妙文を讀誦する時

今此の三界は皆是我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾子なり、而も今此處は諸の患難多し、唯我一人のみ能く救護を爲す。

と無始の古佛の御聲を聞くであらう。己れが口にあぐる聲は直に本佛の妙音となつて己れが耳朵を打つであらう。

と他方の菩薩をも制止した。

佛是を説きたまふ時

本化無量の菩薩は忽然として同時に湧出すべきであらう。我こそは上行菩薩なり、我こそ浮行菩薩なりと大音聲に呼ばわつて、政界の中から、商人の中から、農園の中から、工場の中から、あらゆる方面の生活から一せいに湧出すべき時が来た。

あゝ新しい力よ、出でよ！

そして新しい道を開いて……

あの流るゝ水のやうに……

進の障を治して行け！

應とこたへて皇軍は曠野に誠實の劍を執つた。滿洲に、北支に、上海に、中支に、南支に、そして今や支那全土に擴大した。實相の義を助發せんとする本佛の教誨は無窮の子によつて果されつゝある。

信伏！信伏！皇軍は堂々と直道を進む。

覺めよ窮子！ 支那民族よ！

汝億兆も來りて無窮の道を進み

人間の本懷を遂ぐべし。

と陸に、海に、空に、皇軍はその使命を果しつゝある。この時にこそ日本人の一人一人が妙法蓮華經を受持して各自の持せる力の泉から新しい力を存分に湧出すべきだ。

さればこそ法華經の中に

佛滅度の後に能く是經を持んを以ての故に諸佛皆歡喜して無量の神力を現じたまふ。

と豫言せられたのである。

有縁、最勝の地日本を中心として世界妙化は遂げらるべしと、本佛は教詔せられたのである。今こそ我等は聲を高らかに一心欲見佛と合唱し、不自惜身命と踏み出すべきだ、これこそ最も積極的な攻撃精神であらう。そしてこれこそ不退に進み行く上行への情熱だ。この神兵の行くところ生の歡喜が實を結び、神通の力が湧出する。そしてこの教詔に一切衆生が信伏して、この地上に寂光土が建設され悠久の平和がおとづれる迄は、この神兵はどこまでも前進を続けるであらう。まことに大和日本への無窮の道は難信難解だ。然し堂々たる直道だ。斷じて行へば鬼神も此れを避くべきである。我等はこの確信を恭敬して日々新しく苦行の樂花をささぐるのみである。この神力にして示現せずば日本國の天業は泡沫と消散するであらう。我等は千載一遇の時に生れ、今こそ本懐を遂げんとする。人生の感激、是れにすぐるものがあらうか。我等は深く思ひ、遠く慮つて次の如く確信を温めねばならぬ。

佛國土を建設してこそ一切衆生も眞に成佛を得べきであり、悉得成佛を遂げ得てこそ始めて御列聖の大御心を安んじ奉ることを得べきであらう。と。

記事

本部 團報

全國佛青總會 五月八日、九日の兩日に亘り築地本願寺に於て全國より約二千餘の會員參集第八回の總會を舉行するに當り、場所柄その本尊に就て若干懸念があるので、一應事實を確めた處、釋尊の御尊像を奉安することが明となり、そこで本團からは、河合涉明、和賀義見、山田英二、中村清一等の諸氏參列し、時局反映の三十餘の議案中、本團のものは、佛敎が他の一切の思想的諸勢力に對する根本的關係を明確にし、此の開顯統一的大理想を提けて内外國策の經論を指導せよ。

に就て、八日審議の結果、

今次聖戰の意義は、天業恢弘、天下光宅、人類救済の大業にして即ち佛道實現の菩薩行なり。而して佛敎は涅槃(さとり)を理想として菩薩道の實現を期することを以て本質とするものにして、釋尊は實にその體現なり、故に吾等は皇道を翼賛しつつ、釋尊の敎旨を以て東亞諸民族の精神的指導をなすべし。

春四月！草木は新緑に萌え出づる。人華も一せいに咲かねばならぬ。そして相共に本國土を莊嚴すべきだ。嗚呼！まことにこそ。

一切の群萌類は上行する菩薩だ！ (十三、四、十四)

人生に於ける眞の成功に必要なは何物ぞや。金錢も必要ならず、勢力も必要ならず、智慧も必要ならず、名譽も必要ならず、自由も必要ならず、健康すらも必要なる其一物にあらず。唯一事のみ必要なあり、獨り品性即ち十分に修養したる意志こそ眞に吾人を救済するものなれ。而して若し吾等が此の感能に於て救済せらるる所なき時は、必ず墮落せざるべからず。

ブラツキ

といふ文案に変更可決した、これには河合、和賀兩氏の健闘大に努むる所あつたのである。

幹部會 五月十五日の日曜日午前十時より本部に於て上田理事長始め敎務及び總務の役員數名會合、敎務報告並に次の敎化運動等に關して審議された、近く實現するであらう。

本部例會 毎週火曜日晚の御普觀心本尊鈔の講義は、小林一郎先生に依り、又毎日曜日午後二時よりは、敎務部諸師に依り夫れ／＼勸行法話が益々熱誠に精進されて居る。曙光東天に虹を呈せるの觀か。

大日本立正會報

起塔供養 小西日喜師の御遷化から早やくも百ヶ日を経た五月十三日 多摩墓地第十區に幹部諸氏の報謝の結晶ともいふべき美事な靈塔が、内田氏の奉仕的氣分と相俟つて滞りなく竣成したので、同日午後〇時三十分小松川の本部會館に莊嚴なる法要が營まれ、二時發十餘臺の自動車を連ねて墓地に至り、四時途に彌々最後の永きお別をした。今や靈山から御導きの尊容彷彿として浮ぶ。

立正青年團 五月十五日の日曜日を期して朝八時本部に參集修法の後、磯部團長指揮の下に平井副團長等十餘名は多摩墓

地に参拜した。夫れより東郷、齋藤、高橋の三偉人の靈前に一同題目を三唱して冥福を祈つた。つく／＼と正しい宗教の尊嚴と、平素の信仰の有難さを痛感せしめられる。人間の價値は棺を覆ふて後定まるといふが、人爵以上に天爵、佛爵こそ萬代不滅の輝であらう。

晝食の日の丸辨當を立花屋休憩所に開いて小憩の後、一時頃から徒歩多摩川邊へ進軍した。新緑の萌へ出る山野の景色を満喫しつ、青麥の畑から驚いて飛び立つ雲雀の聲も嬉しく若草を踏む田舎の小路は、平素都塵に汚れた吾等の足には、靴も足袋も抜き捨て、素足にベタ／＼と歩きたかつた。

澄み切つた川の水、淺いので鯉を押へる子供の一群、小石を運ぶ車、遙かに繪の様な鐵橋を走る電車等雜觀を捨て、河原に自由にくつろいだ。携へた果菜に口を動かし、記念の撮影もあり、石投げしたり、子供のやうに遊んでやがて、府中迄テクリ、京王電車の便をかつて新宿午後四時散會した。

青年團茶話會 若人の發刺たる求むる氣持に、月一回丈の會合ではもの足りぬからと、顔見るばかりでもよい毎月上下旬の一日宛を隨所に開かうではないかとの發按に賛成して、第一回を五月十九日小松川の會館に開いた。次は六月四日(土)小石川統一會館に催す豫定、奮つてお出かけ下さい。

福島支部一報

自己紹介と、今の信仰に到達するまでの経路に關する貴い經驗談があつた。散會午後五時半。

同月二十八日夕 中村様方にて磯部先生御指導の下に支部例會を開く。先生より『日蓮聖人の宗旨』なる御法話あり、聖人の御宗旨は妙法蓮華經であり、その妙法蓮華經の尊い所以は壽量品の存在にあると爲し、妙法蓮華經の五字が如何に貴き價値を有し、且つは如何に深き意味を有すかを力説せられた。その一つの記憶を述べお題目を唱へる時は何人でもその苦しみを將又、その悲しみを忘れ、總てを超越した境地に達するものであると。時あだかも名譽の戦死を遂げられたる三澤様御子息の法要に當り、如何に強くこの言の我等が心を打つた事よ。英靈、希くば瞑せよ。後座談會に有效な時を過し、一同法悦に包まれつゝ午後十時半散會。

護法の津田信子刀自

昭和三年春、京洛の地で、本多上人の教恩に浴され其後福岡の方へ移られて居たが、幾程もなく長府に晩年を御静養なつて居た信子刀自は、惜しくも本年一月二十二日世壽六十八歳を以て、安らかに靈山に往詣された。然る處、護法愛國の淨念に充ち満ちた津田家に於ては、刀自清淨の思召を以て、五月一日

四月二十二日 本日は磯部先生の御來福を仰ぎ御法話を戴く豫定の處、都合に依り例會延期の止むなきに至り、新入會員歡迎會のみを行ふた。この日相集へるもの四十有餘名、新會員の数は正に二十數名の多きを算し、さしもの大廣間も立ち所に満員となつた。最初に校長先生初め諸先生の體験に基く信仰のお話あり、次で幹事立つて、護法會同窓會より贈られたる祝辭も代讀、續いて舊會員及新會員の自己紹介に入り極めて効果的な會の進行ぶりを見た。やがて黄昏の色濃く立籠る、午後五時半、漸くにして閉會の辭あり、一同深き喜びを胸に抱きつゝ散會した。

内容のない集會になりはすまいかとの危懼が全然杞憂に終つた事を諸先生方に對し、且つは護法會同窓會の諸兄に對し深く感謝する。

四月二十八日 本日磯部先生を迎へ、本年度最初の例會を開く。出席者三十有餘名。中でも新會員は今日が最初の御世話を伺ふ日でもあり、非常な熱心さで傾聴してゐた。

先生の御法話は、東海の邊隅たる一漁村に於ける聖人の御降誕より始まり、迫害に次ぐ迫害を以てせられた聖人の略傳を説かれ、續いて聖人の御人格の檢討に入り、鐵壁をも砕く如き強き金剛信に言及、智、情、意、の三點より説明を試みられて之を誠心の一つに結ばれた。後、短時間ではあつたが、座談會に入り、二三の意見の交換あり、又新會員諸君からは、

第百ヶ日忌に臨み、愛錫柴崎氏より本團へ金五百圓也御寄贈下さつた。吾等は克くその淨念を體して法國の爲め益々精進を期すと共に刀自の御冥福をお祈り申上ぐる次第である。

法號 顯正院妙揚日信善女人
爲佛果增進追善菩提 南無妙法蓮華經

合掌

大阪の友廣忠正氏より本團の躍進健闘に維持御清援を與へられて、今回金五百圓也特別御寄附下さつた。過般來印刷物等一層昂騰の砌り、恁る意外の御援助を戴くのは決して唯事とは思はれない、御寶前に甚深なる報謝の修法を捧げた。寔に有難い事で一入その重任を痛感しつゝ、爰に厚く御禮を申上げる。
南無妙法蓮華經

團費誌料維持費及寄附金領收

(自四月二十一日至五月二十一日)

一金貳圓五拾錢也	横濱 佐藤 愛子殿	一金壹圓也	東京 小峰 登子殿
一金六拾圓也	同 中村清兵衛殿	一金貳圓貳拾錢也	滿洲 原田喜八郎殿
一金參拾圓也	東京 横山 正三殿	一金參圓也	東京 宇野 博順殿
一金拾圓也	同 柴田 武治殿	一金六圓也	同 野間平次郎殿
一金參圓也	同 高部 静子殿	一金參圓也	同 山田 美二殿
一金六圓也	同 中村 のぶ殿	一金五圓也	同 竹内 さん殿
一金貳圓五拾錢也	同 増井 昇殿	一金五圓也	東京 水野 正益殿
一金貳圓五拾錢也	同 原田 有康殿	一金參圓也	同 山口 智光殿
一金貳圓五拾錢也	小倉 東端 兼吉殿	一金參圓也	東京 鈴木祐五郎殿
一金貳圓也	東京 濱中治三郎殿	一金參拾圓貳拾錢也	マノルル日比野妙鏡殿
一金六圓也	同 加藤晴之助殿	一金貳圓貳拾錢也	三重縣 古市 二郎殿
一金參圓也	横濱 高橋 傳殿	一金四圓四拾錢也	川崎 山田三五郎殿
一金貳圓貳拾錢也	府下 寺澤 信平殿	一金四圓五拾錢也	東京 伊瀬知九子殿
一金五圓也	山口縣 津田 信子殿	一金貳圓也	同 平山 しづ殿
一金貳圓貳拾錢也	東京 釋 眞誓殿	一金貳圓也	千葉縣 花島喜三郎殿
一金貳圓五拾錢也	横濱 青柳 勝三殿	一金壹圓貳拾錢也	大阪 澤田萬壽徳殿
一金貳圓五拾錢也	同 和田 皆吉殿	一金五圓也	東京 高橋 辰二殿
全五百圓也	大阪 友廣 忠正殿		
一金貳圓貳拾錢也	神戸 廣木 月子殿		
一金貳圓貳拾錢也	富山 岡 爲太郎殿		

財團法人統一團會計

右雜有入帳仕候、猶一々の領收證は勝手致居申候に付可然御諒承たまはり度候

御多用中恐縮ですが團費誌料等は成るべく滞らぬやうに御配慮お願申上ます。財施も法施もその功德に優劣はないさうですから、成佛道へと精進致したいものです。

我れ往昔むかし 無量劫の中に於て
 重き所の身を捨て 以て菩提を求む
 若しは國王と爲り 及び王子と作りて
 常に捨て難きを捨て、 以て菩提を求む。

讚佛品第十八

爾の時に 無量百千萬億の諸菩薩衆 合掌して佛に向ひ 異口同音にして讚歎して曰さく
 如來の身は 金色微妙なり
 其の明照耀として 金山王の如く
 身の淨柔軟なる 金蓮華の如し
 無量の妙相 以て自ら莊嚴したまふ
 隨形の好 其の體を光飾し

淨潔比ひ無きこと

紫金山の如く

圓足の垢無き

淨滿月の如し

其の音清徹にして

妙なる梵聲

師子吼聲

大雷震聲

六種清淨なる

微妙の音聲

迦陵頻伽

孔雀の聲の如し

清淨にして垢無く

威徳具足して

百福相好

其の身を莊嚴せり

光明遠く照して

齊限あることなし

智慧寂滅して

諸の愛習無し

世尊は無量の

功徳を成就したまへり。

如來の説く所

第一深義は

能く衆生をして

寂滅安隱ならしめ

能く衆生に

無量の快樂を與へ

能く無上

甘露の妙法を演べ

能く無上

甘露の法門を開き

能く一切

無量の窟宅に入り

能く衆生をして

悉く解脱を得せしむ

三有無量の

苦海を度し

正道に安住して

諸の憂苦無し

如來世尊は

功徳智慧

大慈悲力

精進方便

是の如き無量にして

不可稱計なり

我等今

説くこと有る能はず

爾の時に 信相菩薩即ち此の會に於て座より起ち偏に右肩を袒にし右膝を地に著け合掌して 佛に向ひ讚を説て言さく

世尊は百福

相好微妙なり

光明熾盛にして

無量無邊なり

能く衆生の

無量の苦惱を滅し

又衆生に

上妙の快樂を與へたまふ。

猶日月の

虚空に充滿せるが如し

功德の成就せる

須彌山の

在在諸の

世界に示現せるが如し

爾の時に 道場菩提樹神復讃を説て曰さく

南無清淨

無上正覺は

甚深の妙法を

隨順覺了して

一切の非法

非道を遠離す

佛の無邊行は

希有希有なり

佛の世に出でたまふこと

優曇華の

時に一たび現するが如きのみ

希有なり如來

無量の大悲

釋迦牟尼は

人中の日と爲りて

諸の衆生を

利益せんと欲するが爲の故に 是の如き妙寶

經典を宣説したまふ。

囑累品第十九

佛 皆大に歡喜して是經を囑累せんが故に持法者を讚美す。

金光明經 畢

佛說阿闍貫王女阿術達菩薩經

第六卷の四

西晋月氏國三藏竺法護譯

一時 佛、羅閱祇耆闍崛山の中に出てまじき。時に 舍利弗、摩訶目犍連、摩訶迦葉、須菩提、邠耨、羅云、鸯越、安波夷、憂波離、阿難、是の如き復た異方不可計の是輩、大比丘僧不可計なり。平且に衣服を正し、鉢を持して羅閱大城に入り分衛す。是の尊比丘、城中に詣り街里に順ひ行いて分衛し、次て王阿闍貫の宮に至る。宮人、官屬俱に一處に黙然として従つて乞匄す。

是の時に 王阿闍貫に女有り、阿術達と名づく。年十二、端正にして好潔、光色第一なり。無愁憂、此尊比丘を見て、父王の正殿に轉ぜず、今來坐を起たず、迎へず、作禮を爲さず、亦請じて坐せしめず、亦分衛の具を與へず。諸尊比丘亦默然として此女を觀る。

是の王阿闍貫、女無愁憂を見るに是の尊比丘を恭敬し禮せず。王、顧みて女に謂ふ、汝知らずや、是れ怛薩阿竭阿羅呵三耶三佛の尊比丘なり。以て阿羅漢を得、復た畏るる所なし、所作の事勝、以て重擔を棄つ。生死以て斷じ深く微妙に入れり。其れ是を供養せん者福量る可らず。師と爲り 父と爲り 慈念の福興り一切に施す。汝見て何が故に坐を起たず、默して之を視る。汝何の異利有つて 此の上尊を禮せざる。

女 無愁憂白して言さく 王曾て師子を見るに當に小小の禽獸の爲に、作禮迎逆共に坐すべしや否や。

王 女に答へて言く、見ざるなり。

女 復白さく、王、曾て遮迦越王は當に小國の王の爲に、起つて迎逆作禮共に坐すべきを聞かば否や。釋提桓因は寧ろ諸天の爲めに起つて迎逆作禮するや不や。梵三鉢は寧ろ諸梵を禮するや不や。

答へて言く 見ざるなり。

女復た王に白さく、曾て大海神は小小の陂池溝渠泉流の爲めに作禮するを見るや不や。須彌山は寧ろ衆小山の爲めに作禮するや不や。日月の光明は螢火の明と等しきや不や。女

復た言さく、如是 大王よ、發意して阿耨多羅三耶三善心を求め 一切を度せんと欲し、僧那僧涅の大鎧を被り、大悲大哀を持すこと師子吼の如し。云何が當に恐畏し、比丘の爲に、而も大悲大慈大哀なく師子吼の中を離るべき。云何が當に禮信し歡喜すべき。王、曾て大法王の經論を轉じ、一切を教へて 阿耨多羅三耶三善心を發さしむるを見ん、當に是の比丘少智者の爲めに恭敬作禮すべしや不や。女 王に白さく 大海水の如きは量る可らず、度す可らず、邊際を見る可らず。大智も此の如し。猶ほ復た泉流を受くるに 牛跡中の水の如し、自ら以て満足と謂はんや、寧ろ之を大海に方ぶ可き。是の畏生死の比丘は志、滅度に在りて阿耨多羅三藐三善心を發す、寧ろ當に迎逆作禮すべしや不や。王は曾て大智は須彌山の最尊高の如く、怛薩阿竭法は尊雄たるを見ん、豈に況や智は芥子の如き比丘、迎逆作禮せんや不や。王は寧ろ日月の光を見ん、其明照す所 計量す可からず。怛薩阿竭法の光明、智慧、功德、名聞は 是に過ぐるごとく千億萬倍なり。寧ろ螢火の明、自ら其身を照すに比せん 一切の人に及ばず、志小の比丘は自ら其身を度す。大智の法は三界を明かす、寧ろ迎逆作禮せんや。女、王に白さく、佛、般泥洹の後も尙是輩比丘の爲めに作禮せじ、何に況や、佛 今現在して法則と爲りたまふ。所以は何ん、彼の比丘を禮するは

此法を習ふ爲めに 其三耶三佛法に親近し、三耶三善行を得ん。

王 女無愁憂に告ぐ、汝 舐突の心有り 是の大比丘を見て、恭敬、迎逆以て坐席を賓主の爲にせず、而も廣く衆喩を引いて 飯食の設けを念はず、汝 何を志求する。

女、王に白さく、大王、寧ろ舐突の心有りや、女、王に謂つて言さく、王は何が故に國中の羸劣にして下賤の乞匄者を見て作禮を爲さざる。

王 女に答へて言く、不爾、此れ吾類に非らず。

女 王に答ふ亦是の如し、王の發意は菩薩、聲聞、辟支佛其類に非ず。

王、女に告ぐ 吾れ聞く、菩薩の法を行ずるは悉く強梁、瞋恚の心を棄て、以て調順、軟弱にして一切の人の爲めに下屈す。汝豈に軟弱の心無けん。

女 王に白して言さく、世間の人は愚痴にして、常に毒惡の心を懷くが故に、菩薩摩訶薩は慈悲を以て彼人を護り、衆毒を除かんと欲す。故に此大比丘諸垢以て除くる。是輩比丘、善を見るも増す所なく、惡を見るも亦減せず。女 王に白さく、當來十方の佛 設ひ是比丘等の爲めに 深妙の法を説きたまふも、復増精進する能はず、所以は何ん、生死の道を閉塞せるをもつての故に。譬ば瓶に水を盛滿し以て露地に置く。天雨、瓶中に一滂

も受けず、滯も亦入ることを得ず。所以は何ん、其の瓶は満つるを以ての故に。女 王に白さく、是の比丘等是の如し、若し十方の佛爲めに神足變化を現じて、經法を説かんと、如來三昧に逮及ぶ能はず、功德に於て増益する所なし。女 王に白さく 譬ば 大海の萬水 四流皆海に歸するが如し。所以は何ん、其海廣長にして受る所 計量す可らず。是の如く大王よ、菩薩摩訶薩は經法を説て當に是の見を作すべし、饒益する所多く、摩訶衍の心を發こし 容受する所多からん。所以は何ん、菩薩摩訶薩の器は 受くる所計る可らず、數ふる可らず、量る可らず。

舍利弗心に念ずらく、是の語甚だ怪む可し、所説に罣礙なし、黠慧 乃ち爾なり。我れ之を試み知らんと欲す、能く歡喜して忍ぶや不や。舍利弗謂く、女無愁憂、郷は三乘を志欲して何を求むる。

女報じて言く、大悲大慈に乗じて所求す。

舍利弗報じて言く 摩訶衍三跋致を求めんと欲するや。

女 答へて言く不なり。

舍利弗復た問ふ、女の行何を求めんと欲して乃ち師子吼を作す。

女 答ふ、舍利弗、所求に於て無所求なり、所求有れば則ち師子吼を爲さず、無所に住止して能く師子吼を作さん。郷舍利弗、法を以て證を取る、寧ろ聲聞、辟支佛法 摩訶衍法有りや不や。

舍利弗答へて言く、諸法相無し、一のみ。空にして無所有なり。

女 問ふ、舍利弗、諸法の空は何の行法を作して三乘を設くる。

舍利弗 女に答へて言く、無所行なり。舍利弗 復問ふ、女よ 佛法は有りや、佛法は

有ることなしや 異有りや無しや。

女 答ふ、尊者舍利弗、近空、及び遠空、異有りやなしや。

舍利弗答へて言く 異なし。

女 問ふ、舍利弗、譬へば内空、外空、異有りや無しや。

答へて言く 異無し。

是の如し 舍利弗よ 得佛法、未得道法 適等して異無し。女 舍利弗の爲めに種種に空空の法を説く。舍利弗默然として 異の辯才此言に折答する無し。

爾の時に 王阿闍貫は 女無愁憂に告ぐ、汝知らずや、尊者羅云は是れ遮迦越王種にし

て尊第一なり、道徳を信用するが故に少小にして家を棄て行じて沙門と作る、遮迦越國を棄つ是れ 佛釋迦文の子にして持戒第一なり。汝云何が反て輕戲し禮敬を以てせざるや。女、王に白さく、止みね、是の語を説くこと莫れ、寧ろ神丹の珠を以て之を水精に比す可き、王は曾て師子を見て當に蠱狐を生すべき、遮迦王子、豈當に小國の王と爲るべき。王言く、不爾。

女復た王に白さく 當に是の因縁を知るべし、彼の羅云は怛薩阿竭に従はず、父母胞胎の生と爲る、怛薩阿竭の師子行は 皆九十六種の道を降伏し、神通の智、悉く具足して大聖猛と爲り 一切の諸法は悉く了知し罣礙する所無し、等しく一切人心の念知する所を知り、當來、過去、今在悉く曉知す。大醫王と爲り、人の苦痛を療し、常に一切に轉法輪を勸助す。舍利弗、摩訶目犍連、摩訶迦葉、須菩提、鸯越、羅云、阿難、是の如きの輩は、法を聞いて皆奉行するも、猶是れ佛の子に非らず。

爾の時に 諸尊聲聞、大衆の中に在り、女 爲めに經法を説く。若し善男子 善女人 佛の爲めに眞子を作らんと欲せば、當に阿耨多羅三耶三善心を發すべし。無愁憂女 諸尊聲聞に問ふ、分衛の法を曉ると爲すや不や。

諸尊聲聞、女に答へて言く、以曉とは云何が曉なる

答へて曰く、身に四神有り、因縁より生ず、常に覆蓋順化し壞敗有ることを懼るの故を以て、當に之を飯食すべし、是の身は飯食を以て立つことを得、飯食無ければ則ち是の身は安隱なるを得ず、譬へば弊壞の車の如く、脂膏を須ひて所安を得、是れ食する所以なり。



佛說阿闍貫王女阿術達菩薩經

畢

大乘三聚懺悔經

第十七套の二

隋開皇年閣那崛多共笈多等 於大興善寺譯

身業に三種、口業に四有り、意に三業を行す。

未來の十方世界、諸の世界中に當に如來應供正遍知有るべし、初發心より所有の六波羅蜜を修行し福聚を和合せり、彼等一切を我れ今皆悉く是の如く隨喜す。

大乘三聚懺悔經 畢

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	金壹圓八拾錢
法華經要義	露天覽	特價	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		特價	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		特價	金貳圓九拾錢
真理の基礎に樹つ佛教の信仰		特價	金拾五錢
法華經要品		特價	金五拾錢
日生上人レコード(四面)		特價	金參圓廿五錢
日蓮聖人		特價	金拾錢
本尊意識に就て		特價	金貳拾錢
釋尊の八相成道		特價	金貳拾錢
法華經の心髓		特價	金貳圓五拾錢
佛敎の心髓		特價	金壹圓七拾錢
河合妙明著		特價	金壹圓
皇道と日蓮主義		特價	金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ十七
財團法人 統一出版部
販替東京九四〇番

月刊「教」誌
申込所 東京市小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
振替東京九四〇番
發行所 金壹圓貳拾錢
金拾五錢
金壹圓

統一定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御購居ノ場合ハ必ず新覆共直ニ御通知ノ事
昭和十三年五月廿八日印刷納本
昭和十三年六月一日發行

不許複製
東京市小石川區音羽町六ノ十七
編輯發行人 磯部滿事
東京市四谷區内藤町一
印刷人 山田英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

發行所 東京市小石川區音羽町六ノ十七
財團法人 統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四〇番



次 目

佛教の根本と其の應用(其二)	本多日生
開目鈔講話(第二十一講)	小林一郎
大善は大禍より起る	惜道居士
神佛二教の會通	和賀義見
時局と轉向者	本郷常次郎
記事	
○本部團報	
○福島支部報	
○團費誌料寄附金及維持費領收	
大藏經要義續篇(其十一)	本多日生



號月七年三十四第

13.9.18.3